第12章　一時保育・子育て広場利用者の子育ての様子

近年、保育ニーズが多様化する中で、一時保育や子育て広場といった新しい保育サービスの重要性が高まりつつある。本章では、一時保育と子育て広場を利用する親が、どのような子育て環境にあるか、また、どのような保育サービスを求めているかについて把握していく。前半では「一時保育」について、後半では「子育て広場」について、それぞれを利用する親の属性、子育ての様子、子育てに対する悩みや不安を明らかにする。さらに、一時保育と子育て広場に対してどのような意識を持っているかについて述べる。こうした作業を通じて、今後の子育て支援への示唆を得ることが本章の目的である。

1．一時保育

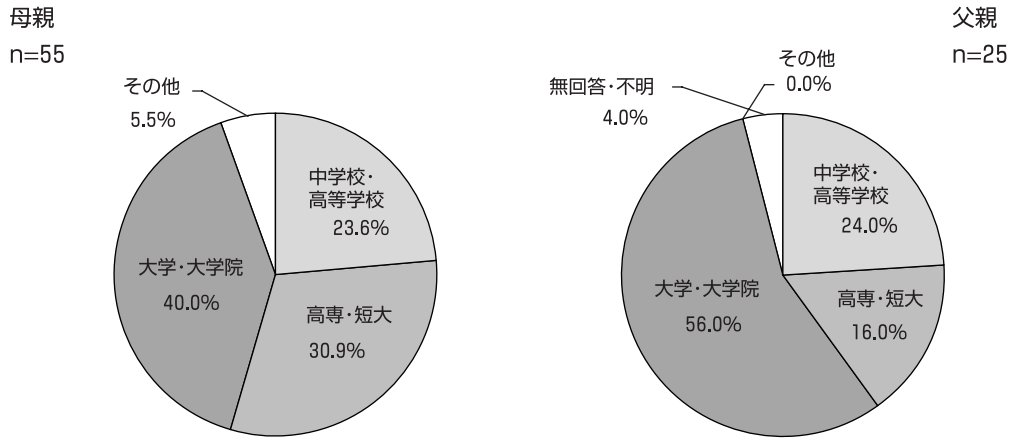
(1) 一時保育利用者の概要

以下の分析は、「一時保育のみを利用していますか」という質問に対し、「はい」と回答した保護者のうち、保育園の一時保育を利用する80名を分析対象者とし、幼稚園が実施する一時保育の利用者は除外した。対象者の内、母親が55名（68.8%）、父親が25名（31.3%）である。対象者数が少ないため、以下では多変量解析は行わず、現状を記述的に明らかにしていくこととする。

①基本属性

一時保育を利用する親の平均年齢は、母親が34.3歳、父親が36.3歳である。また、親の学歴は、「大学・大学院」卒が最も多く、母親では40.0%、父親では56.0%を占めている（図表12−1）。

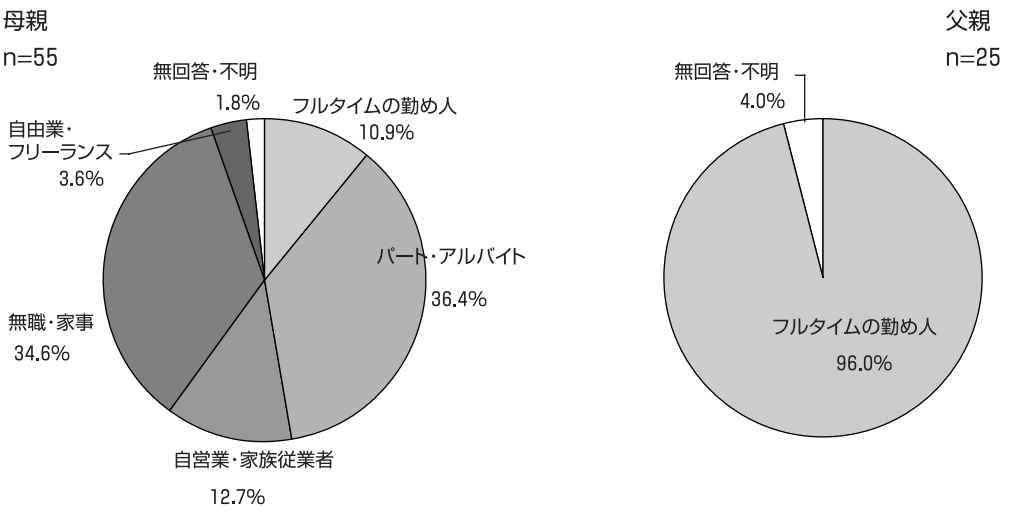
図表12−1　学歴



就業については図表12−2に示した。父親では9割以上が「フルタイムの勤め人」であるが、母親では「無職・家事」と「パート・アルバイト」の割合が同じで、それぞれ34.6%を占めている。その他、「フルタイムの勤め人」が10.9%、「自営業・家族従業者」が12.7%、「自由業・フリーラ

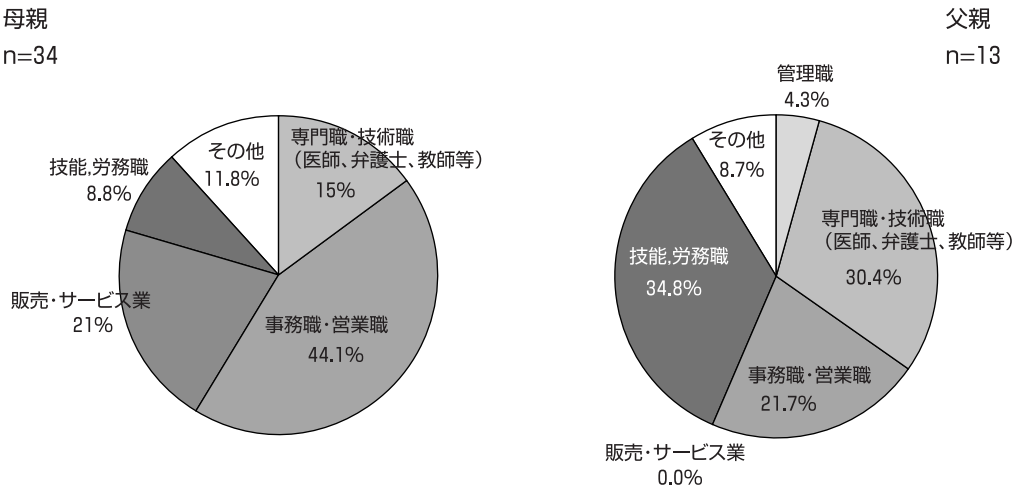
ンス」も3.6％で、多様な就業形態がみられる。

図表12−2　就業形態

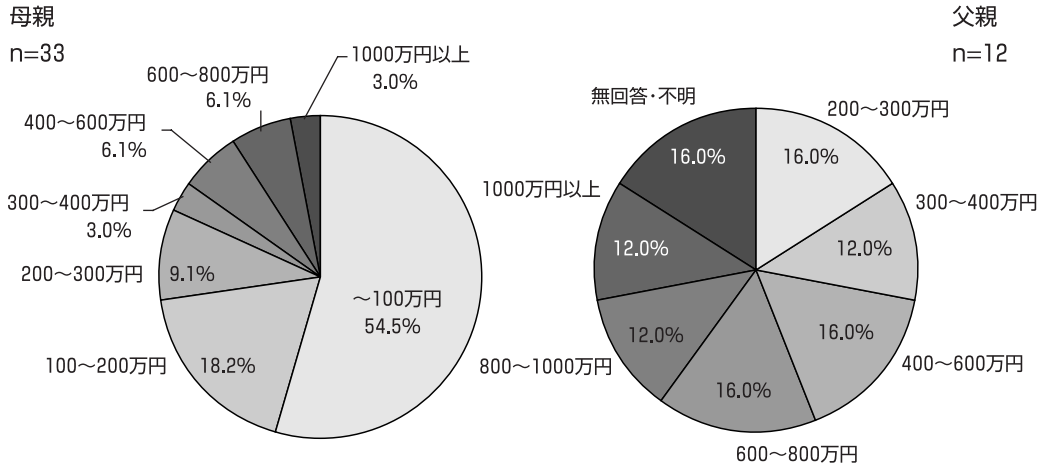


就業している親の職種については、図表12−3に示した。母親では「事務職・営業職」が最も多く、4割以上を占めている。続いて、「販売・サービス業」、「専門・技術職」などが多い。父親では、「技能・労務職」と「専門職・技術職」の占める割合が大きく、どちらも3割以上を占める。年収については図表12−4に示すとおりで、母親では100万円未満が最も多い。フルタイムで働く親は少ないものの、週あたりの労働日数は、母親、父親ともに「5日」と回答した者が最も多かった。週に「1日」や「2日」はいずれも2.9％と少数である（図表12−5）。

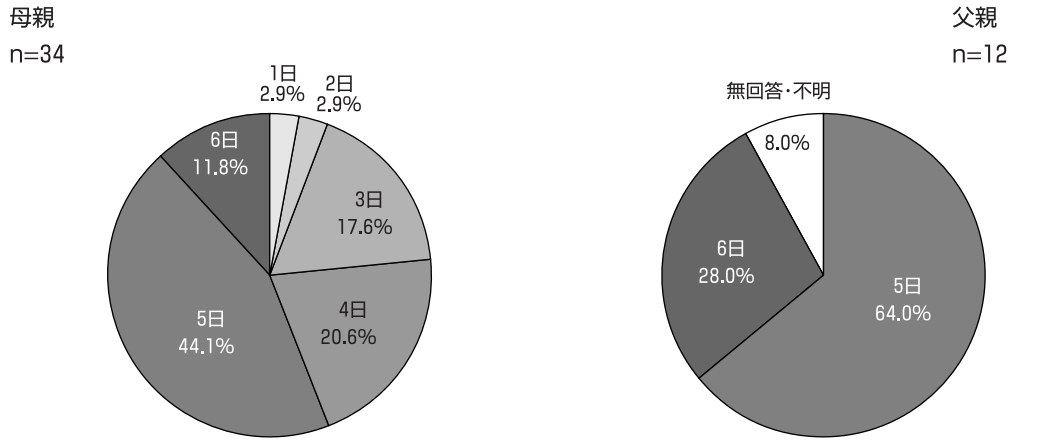
図表12−3　職種



図表12−4　年収



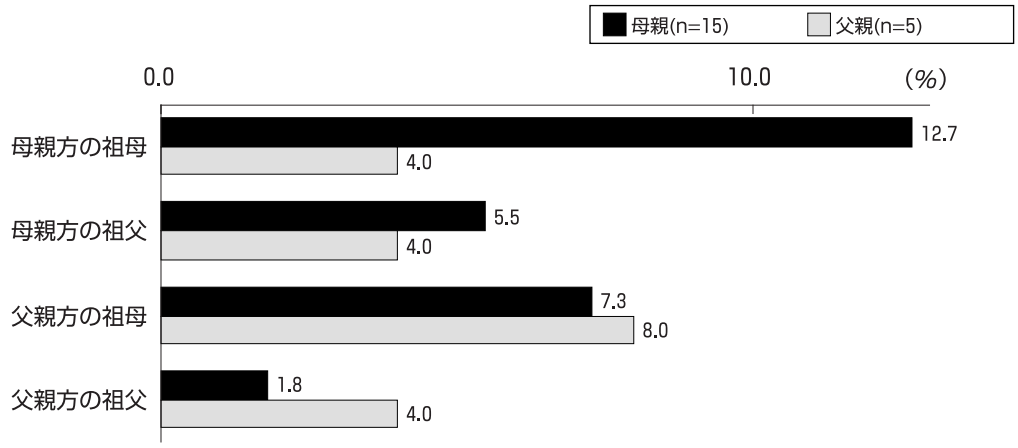
図表12−5　労働日数（週）



次に、家族形態についてみていこう。配偶者と同居している割合は、母親が80.0%、父親が92.0%であり、単身赴任を含む別居の割合は母親が3.6%、父親が0.0%であった。一時保育利用者の内、シングルマザーは16.4%、シングルファザーは8.0%を占めている。

また、祖父母との同居については、同居していない割合が母親では72.3%、父親では80.0%であり、同居している親の内、母親では自分の母との同居が最も多く12.7%、父親でも自分の母との同居が最も多く8.0%である（図表12−6）。

図表12−6　家族形態

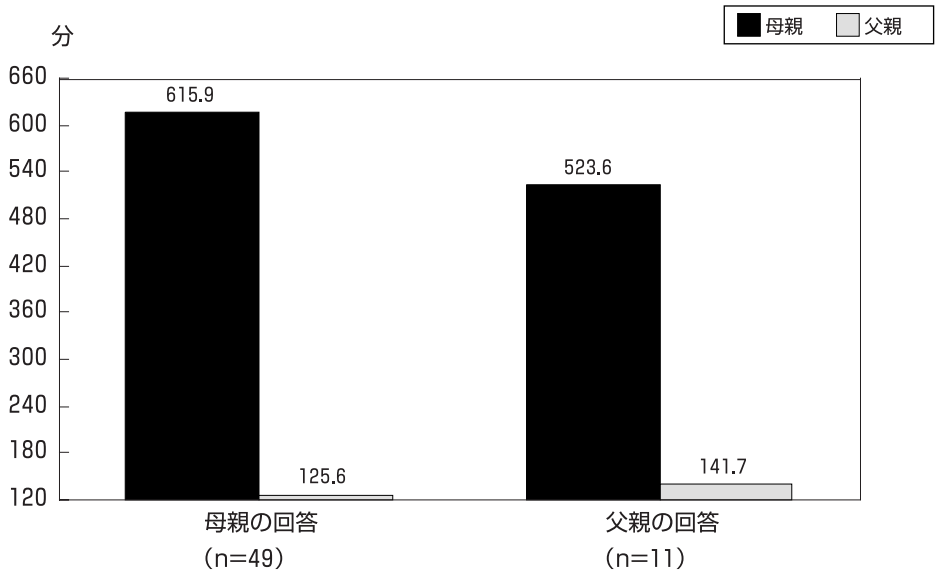


(2) 子育ての様子

①親の家事・育児の状況

一時保育利用者は、どれくらいの時間を家事・育児に費やしているのだろうか。平日1日あたりの家事・育児時間についての回答をみると、母親の回答では「母親の家事・育児時間」が615.9分、「配偶者の家事・育児時間」は125.6分となっており、父親の回答では「父親の家事・育児時間」が141.7分で「配偶者の家事・育児時間」が523.6分となっている。調査対象者全体の回答は、母親の家事・育児時間が609.4分、父親の家事・育児時間が77.5分であり、母親の方では対象者全体と一時保育利用者であまり差がないのに対し、父親では一時保育利用者の方が1時間程度多いことがわかった。

図表12−7　家事育児時間

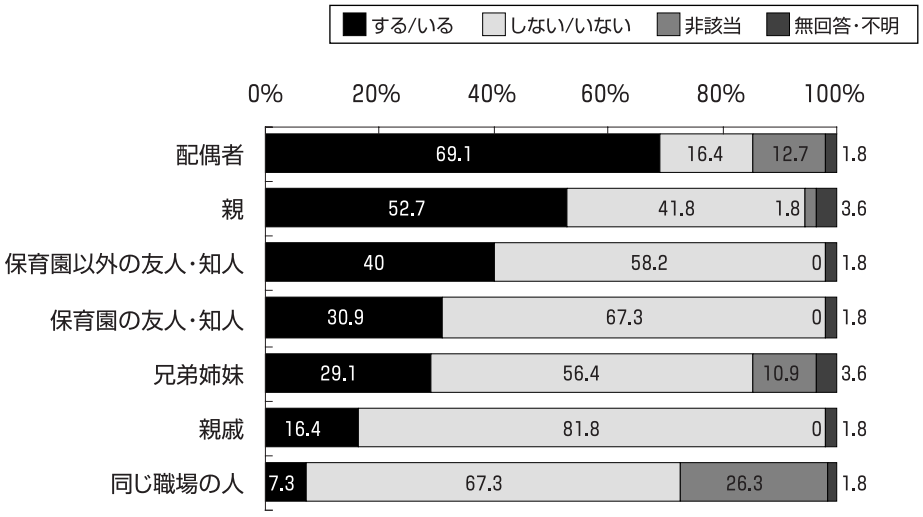


②育児サポート

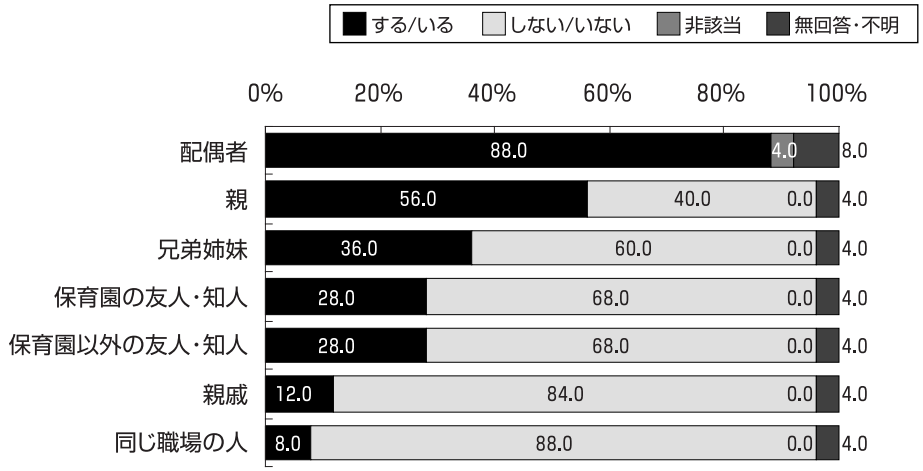
次にとりあげるのは、一時保育利用者が保育園以外にどのような育児サポートを得ているかについてである。本調査では、外出中に子どもの世話をしてくれる人と、育児の相談にのってくれる人の二つのサポートについて聞いている。「外出中の世話」という手段的サポートについて、母親では「配偶者」をあげた割合が69.1%、「親」が52.7%であった（図表12−8）。注目すべきは、配偶者がいても、世話をしてくれないという回答が16.4%を占めることである。その他、兄弟姉妹は29.1%、親戚が16.4%であり、親族ネットワークの中でも配偶者と親が中心となっている。母親では、配偶者と親を除けば、外出中に子どもの世話をしてくれる人が身近にいる者がいずれも低い割合となっており、インフォーマルなネットワーク構築はあまりなされていない現状が明らかになった。

父親では「配偶者」が88.0%、「親」が56.0%であり、母親の場合と順位は変わらないが、次に「兄弟姉妹」が36.0%と多く、友人・知人を上回っているのが特徴的である。

図表12−8　外出中に子どもの世話をしてくれる人（母親）

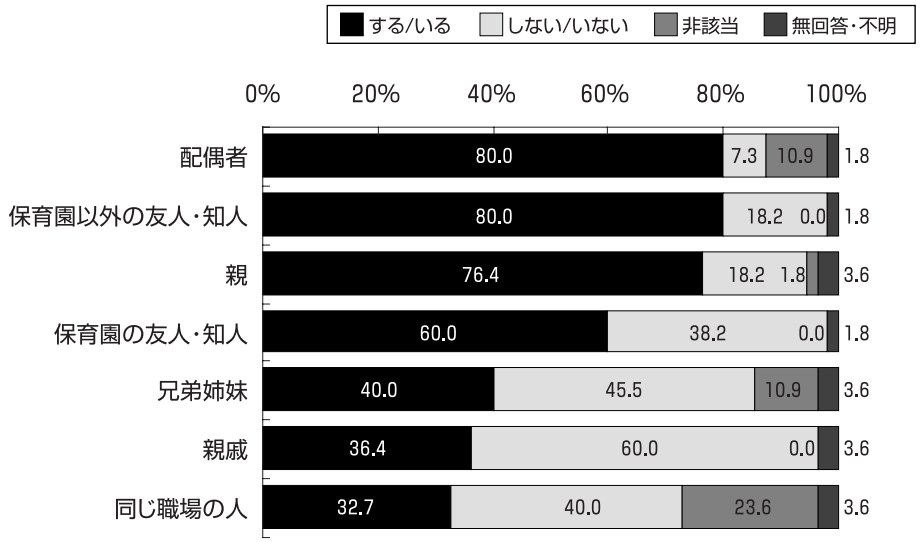


図表12−9　外出中に子どもの世話をしてくれる人（父親）

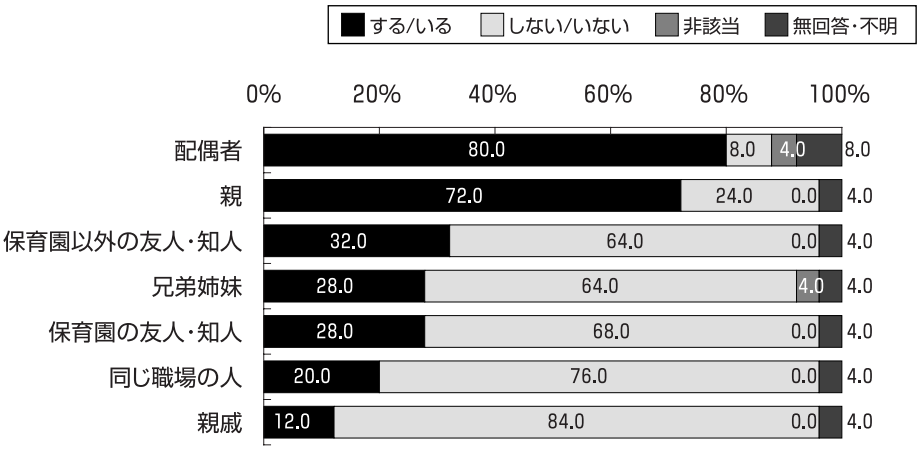


「育児の相談にのってくれる人」という情緒的サポートについて、図表12−10、図表12−11に結果を示した。母親の場合、「配偶者」と「保育園以外の友人・知人」が最も多く、それぞれ80.0%を占めている。先に述べた「外出中に子どもの世話をしてくれる人」では、「配偶者」の次に多いのが「親」であったのに対し、育児の相談では「保育園以外の友人・知人」が「親」を上回っている。父親では「配偶者」が80.0%、「親」が76.0%であり、その他の人は約3割に満たない。母親にくらべて育児の相談にのってくれる人は少ないといえるだろう。

図表12−10　育児の相談にのってくれる人（母親）



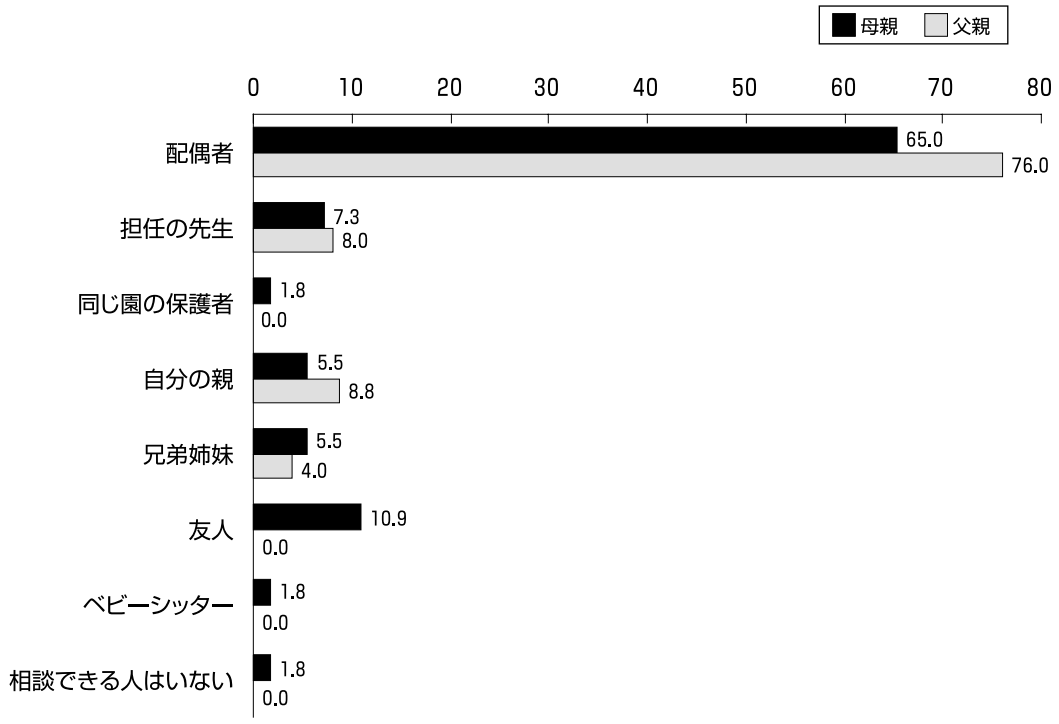
図表12−11　育児の相談にのってくれる人（父親）



さらに、「子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人」についての回答を示したものが図表12−12である。「担任の先生」は母親が7.3%、父親が8.0%であり、1割に満たない。しかし、通常保育を利用する親よりも、担任の先生をあげる割合はわずかながら多いこ

とがわかった。また、母親では「友人」が10.9%、「同じ園の保護者」をあげた人はわずか1.8%となっている。一時保育の場合、通常保育に比べると同じ園の保護者と接する機会も少なく、育児の相談をする相手は、配偶者に集中しているのが現状といえよう。

図表12−12　子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人



(3) 子育ての不安と子育ての悩み

①育児不安・体罰傾向

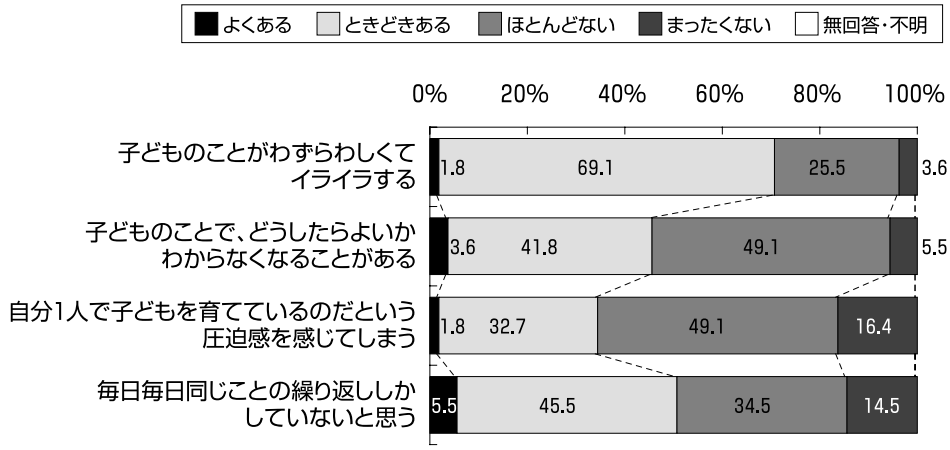
図表12−13と図表12−14は、育児不安の各質問項目の単純集計を示したものである。母親では、「子どものことがわずらわしくてイライラする」という項目に対し、「よくある」という回答は1.8%で少ないものの、「ときどきある」という回答は69.1%を占め、両方をあわせると7割に上る。それに対し、父親では「よくある」と「ときどきある」をあわせても、4割を超える程度であった。

母親と父親の差が最も大きかった項目は、「自分ひとりで子どもを育てているのだと言う圧迫感を感じてしまう」というもので、母親では33.5%が「ある」と回答しているのに対し、父親では4%と少なかった。それに対し、「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」という項目は、母親では「よくある」が5.5%、「ときどきある」が45.5%、父親は「よくある」が8.0%、「ときどきある」が36.0%を占めている。両方をあわせた割合は母親では5割強、父親では4割強となっており、他の項目に比べて母親と父親の差が小さいことが興味深い。

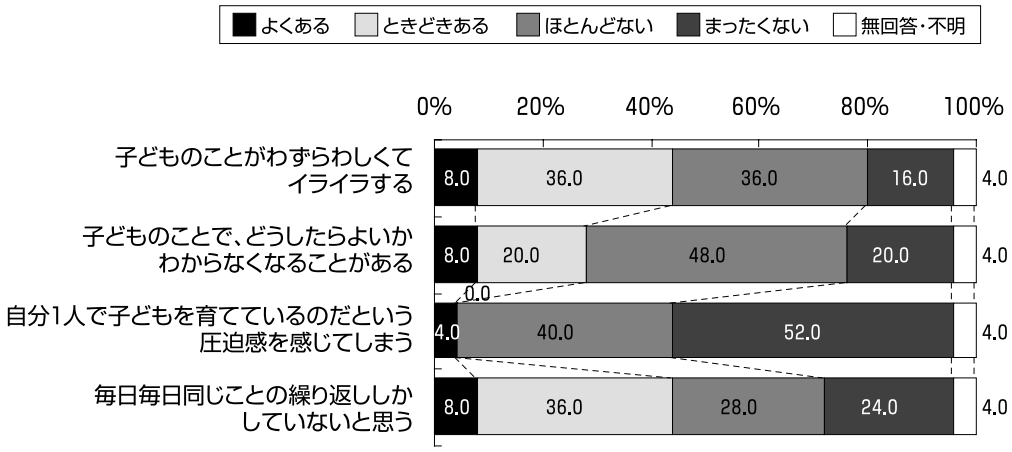
また、4項目の合計点の平均は母親が9.7点、父親が8.4点であり、母親の方が高くなっている。通常保育を利用する母親の平均点は9.8点、幼稚園を利用する母親の平均点が10.2点であったが、一時保育を利用する母親の育児不安は通常保育を利用する母親と差がなかった（5章参照）。一方、

通常保育を利用する父親の平均点は7.9、幼稚園を利用する父親の平均点は7.7であり、一時保育を利用する父親の育児不安は比較的高いといえよう。

図表12−13　育児不安の単純集計結果（母親）

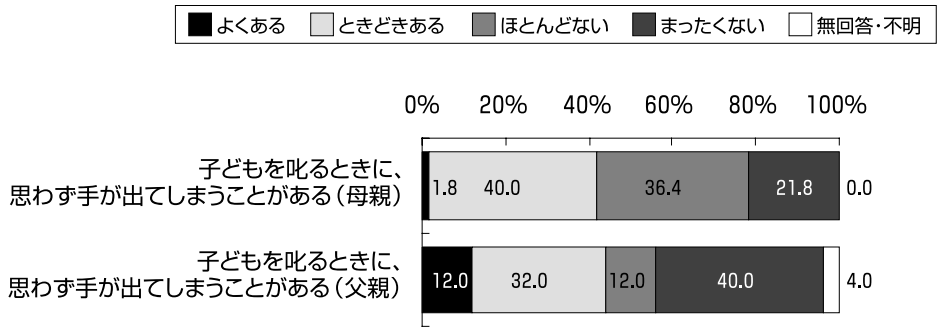


図表12−14　育児不安の単純集計結果（父親）



「子どもを叱るときに思わず手が出てしまう」という体罰傾向については、図表12−15に示した。一時保育利用者では、母親の41.8%、父親の44.0%が「ある」と回答している。一方「まったくない」と回答した割合は母親が21.8%、父親が40.0%となっており、父親の方が多かった。調査対象者全体では「ある」と回答した母親が58.2%、父親が39.5%となっており、一時保育を利用する母親は、比較的体罰傾向が弱いといえよう。一方、一時保育を利用する父親は全体に比べて比較的体罰傾向が強いことがわかった。

図表12−15　体罰傾向

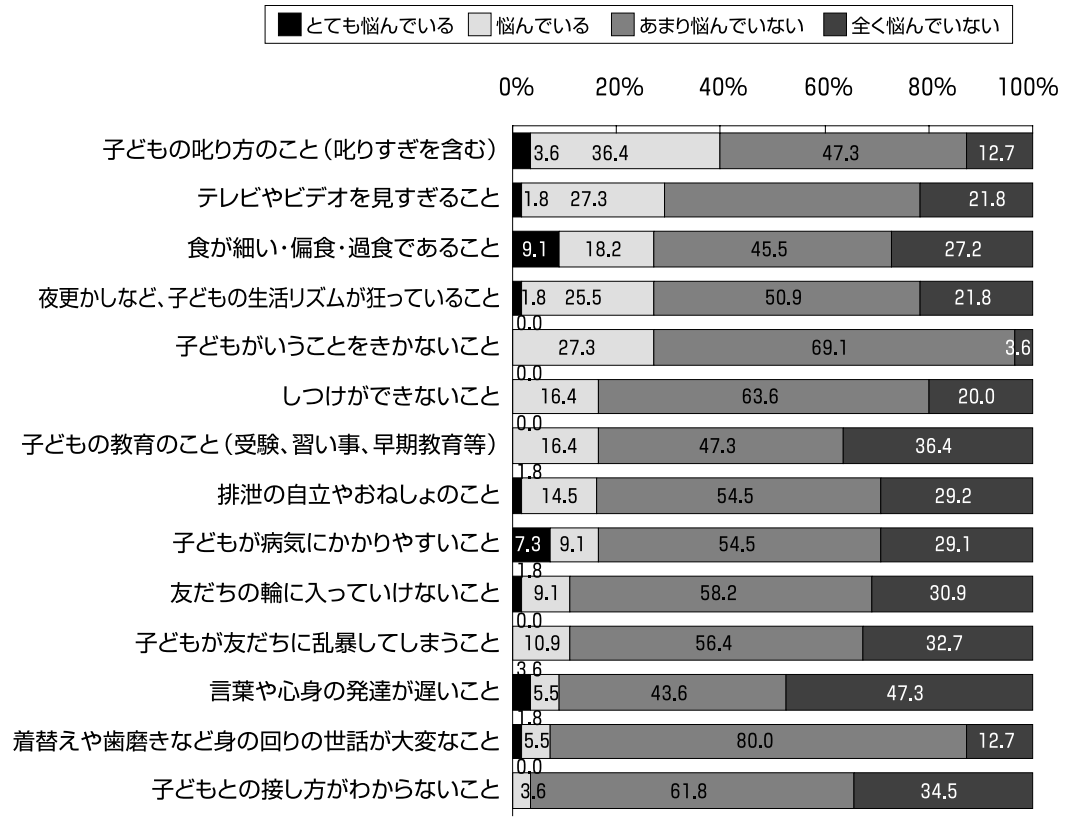


②子育ての悩み

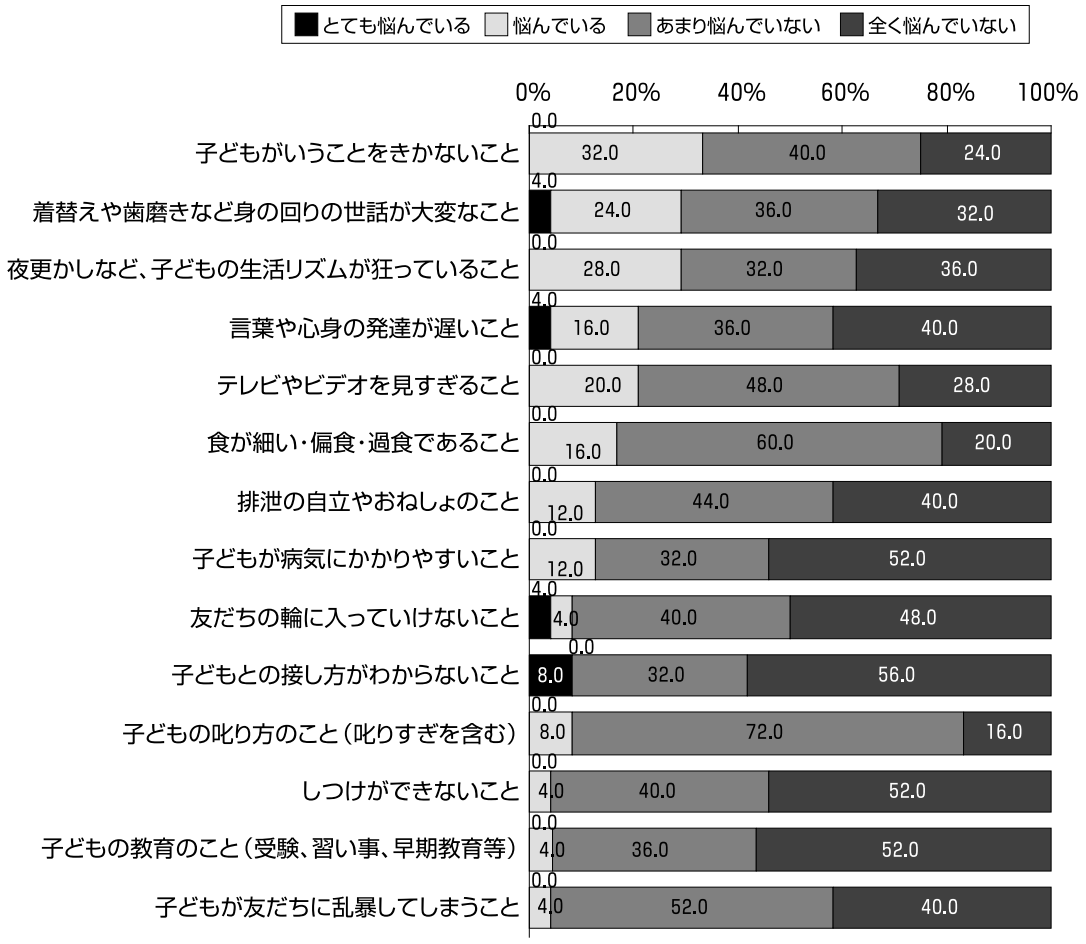
子育ての悩みについてたずねた結果が、図表12−16と図表12−17である。母親の場合、悩んでいる（「とても悩んでいる」と「悩んでいる」を合計した割合）割合が最も高い項目は、「子どもの叱り方のこと」で40.0%を占めている。調査対象者全体（34.1%）に比べて若干高い割合となっている。続いて「テレビやビデオを見すぎること」が29.1%、「食が細い・偏食・過食であること」が27.3%となっており、メディアとの接触、食の問題といった生活習慣の悩みが上位にあげられている。一方、悩んでいる割合が低かった項目は、「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変なこと」（7.3%）、「子どもとの接し方がわからないこと」（3.6%）などである。

一方、父親では悩んでいることの上位に、「子どもがいうことをきかないこと」（32.0%）、「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変なこと」（28.0%）があげられている。また、「とても悩んでいる」と回答した割合が最も多かったのが、「子どもとの接し方がわからない」（18.0%）という項目であった。一方、母親の悩みで最も多くあげられていた「叱り方のこと」は、父親では8%と少ない。

図表12−16　子育ての悩み（母親）



図表12−17　子育ての悩み（父親）

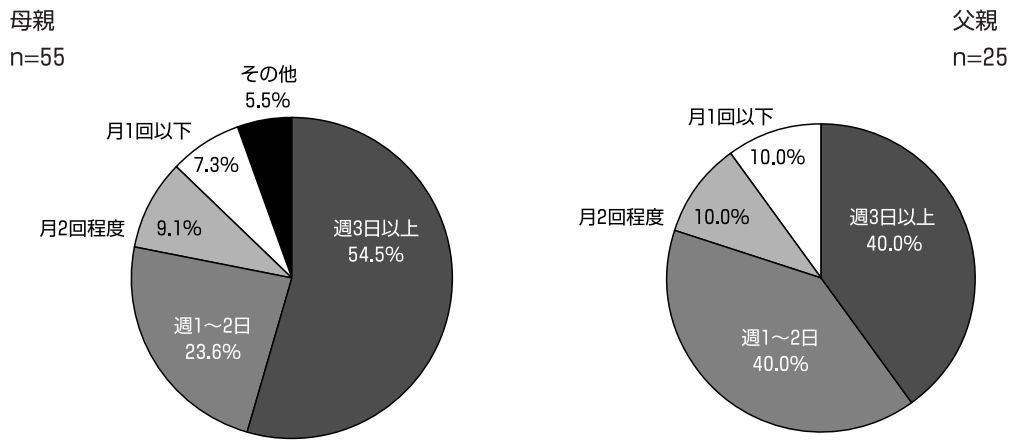


(4) 園や担任の先生に対する意識

①利用の現状

以下では、一時保育の利用に関する現状や、園に対する意識について述べていく。まず、一時保育の利用頻度を図表12−18に示した。母親では「週3日以上」という回答が最も多く、6割近くを占めている。続いて、「週に1〜2日」という回答が23.6%、「月2回程度」が9.1%、「月1回以下」7.3%であった。父親では「週3日以上」と「週1〜2日」がそれぞれ40.0%で、父親、母親ともに週1回以上の利用が8割を占めている。

図表12−18　利用頻度

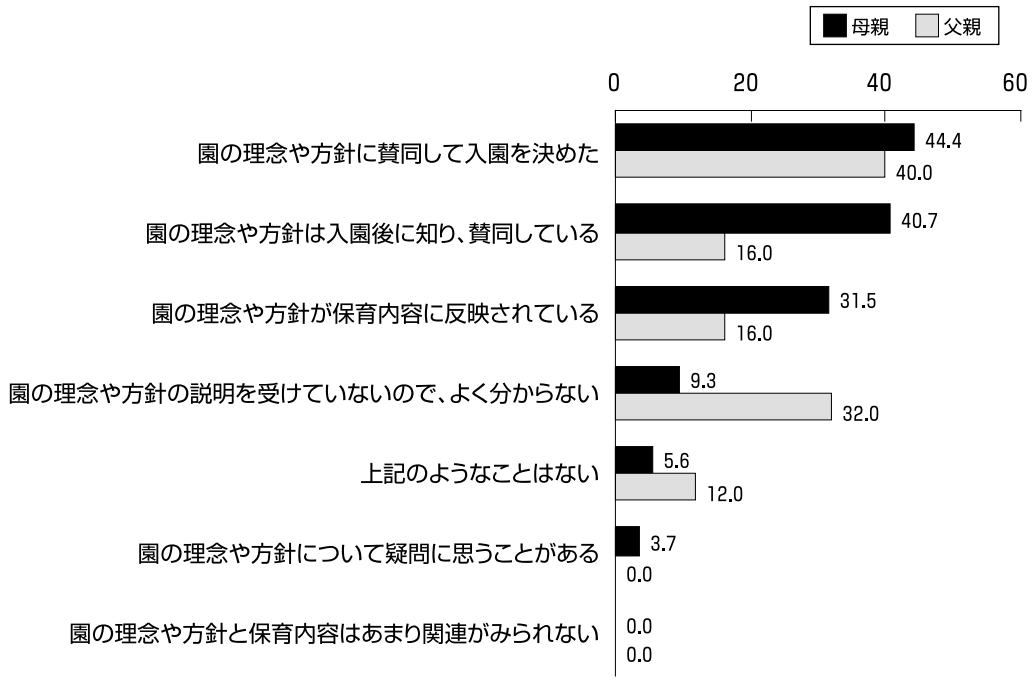


②園の理念や保育方針について

園の理念や保育方針についてたずねた結果を示したものが図表12−19である。最も多い回答は、「園の理念や方針に賛同して入園を決めた」というもので、母親、父親ともに4割以上を占めている。これは通常保育を利用する親の回答（30.4%）よりも高いものであり、通常保育に比べて、一時保育を利用する親の方が、園の理念や方針を重要視していることがうかがえる。

しかし、「園の理念や方針が保育内容に反映されている」という項目は、母親では31.5%、父親では16.0%しか支持されていない。また、8割以上の母親が入園前、もしくは入園後に園の理念や保育方針を理解し、賛同しているのに対し、父親では5割を超える程度と少ない。父親では「園の理念や方針の説明を受けていないので、よく分からない」という回答が32.0%を占めており、園の理念や保育方針に関する父親の理解不足が特徴的といえよう。

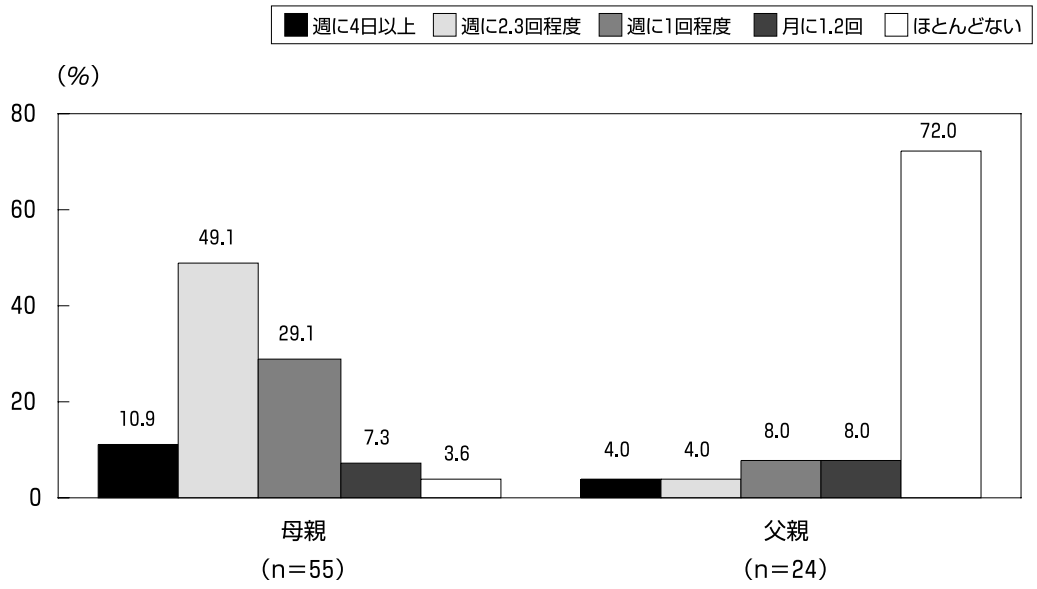
図表12−19　園の理念や保育方針について



③担任の先生と話す頻度

担任の先生と話す頻度については、母親と父親のちがいが大きかった（図表12−20）。母親では、約半数が「週に2、3回程度」と回答している。「週に4日以上」が10.9%、「週に1回程度」が29.1%となっており、これらをあわせると、9割以上の母親は週に1日以上は担任の先生と話をする機会を持っている。一方、父親では7割以上が「ほとんどない」と回答している。

図表12−20　担任の先生と話す頻度

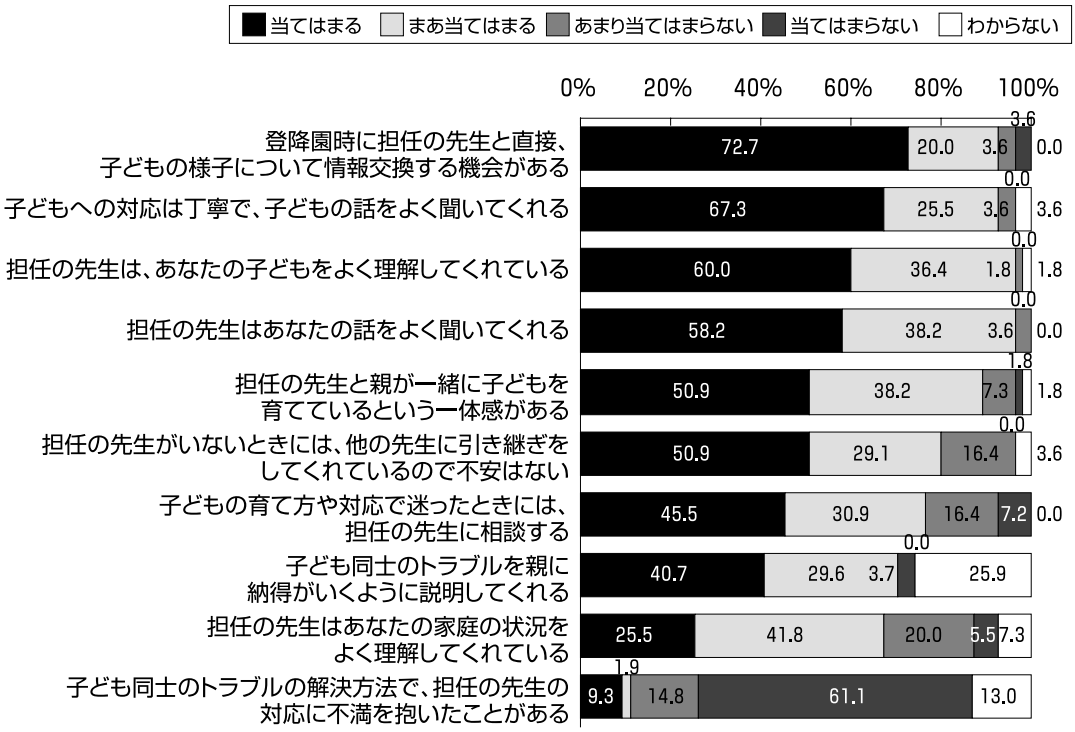


④担任の先生の対応

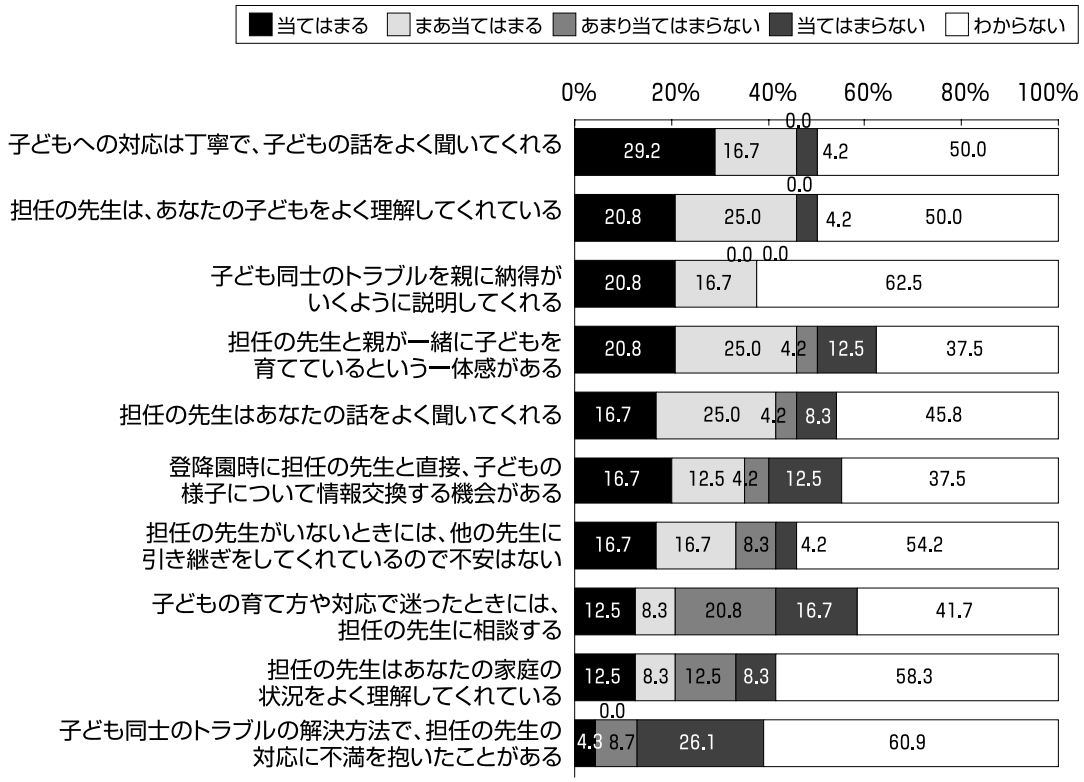
担任の先生の対応を示す10項目についてたずねた結果が、図表12−21と図表12−22である。母親で「あてはまる」と回答した割合が最も多かったものは「登降園時に担任の先生と直接、子どもの様子について情報交換する機会がある」（72.7%）というものである。父親では「あてはまる」が16.7%、「まああてはまる」が12.5%で、合計しても3割に満たなかった。次に多かったのが「子どもへの対応は丁寧で、子どもの話をよく聞いてくれる」（67.3%）、「担任の先生は、あなたの子どものことをよく理解してくれている」（60.0%）という項目で、子どもへの対応については概ね評価が高いといえるだろう。

「あてはまる」という回答が少なかった項目としては、「担任の先生はあなたの家庭の状況をよく理解してくれている」（25.5%）があげられる。また、「子ども同士のトラブルを親に納得がいくように説明してくれる」という項目や、「子ども同士のトラブルの解決方法で、担任の先生の対応に不満を抱いたことがある」という項目については、「わからない」という回答が多くなっており（それぞれ25.9%、13.0%）、一時保育中に子ども同士のトラブルがあるのかどうかさえわからないという親の様子がうかがえる。

図表12−21　担任の先生の対応（母親）



図表12−22　担任の先生の対応（父親）

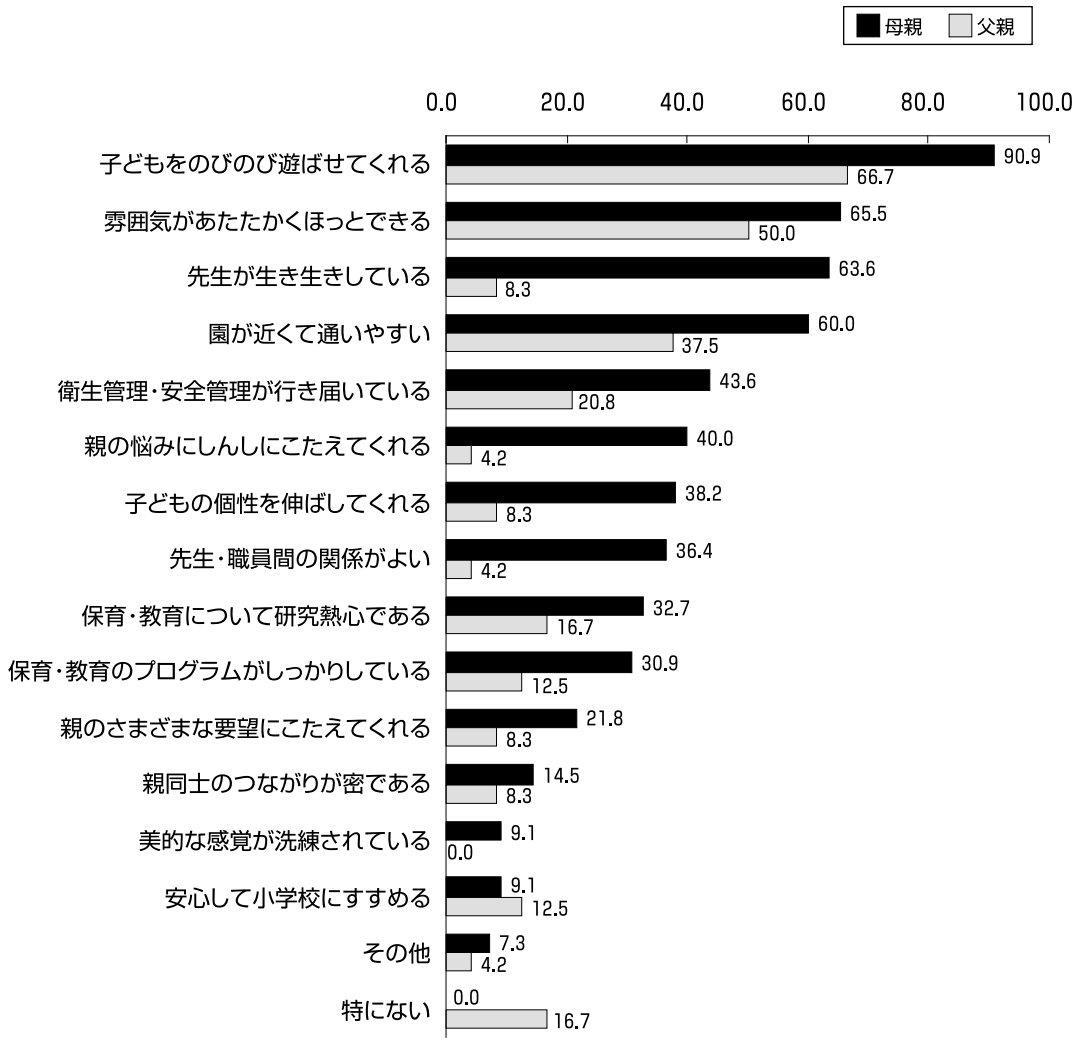


⑤園の気に入っているところ

園の気に入っているところでは、母親、父親ともに「子どもをのびのび遊ばせてくれる」という項目が最も支持されている（図表12−23）。母親では90.9%と非常に高い割合を占めているが、こうした結果からは、保育園以外の場所ではいかにのびのび遊ばせることができないかという現状を示していると思われる。次に支持されている項目は、「雰囲気があたたかくほっとできる」というもので、母親では65.5%、父親でも50.0%の割合で支持されている。3番目に多かったのは「先生が生き生きしている」という項目であるが、これについては母親と父親の差が大きく、母親では63.6%であったのに対し、父親では1割にも満たなかった。父親は先生と接触する機会がほとんどないため、このような結果になったものと思われる。続いて「園が近くて通いやすい」という項目が母親では60.0%、父親では37.5%の割合で支持されている。これまでの順位は、通常保育の利用者があげた項目と一致しているが、次に多かったのは「衛生管理・安全管理が行き届いている」というもので（母親43.6%、父親20.8%）、通常保育利用者ではあげられていないものである。また次に多い、「親の悩みにしんしにこたえてくれる」（母親40.0%、父親4.2%）という項目も、通常保育ではあまり支持されていないものであり、一時保育では「衛生管理や安全管理」という側面や、「親の悩みに応える」という子育て支援の側面が求められているようである。

一方、支持の低かった項目は、「安心して小学校にすすめる」（母親9.1%、父親12.5%）、「美的な感覚が洗練されている」（母親9.1%、父親0.0%）などである。また、「園の気に入っているところ」について、「特にない」と回答した者は、母親では0.0%であったが、父親では16.7%を占めている。

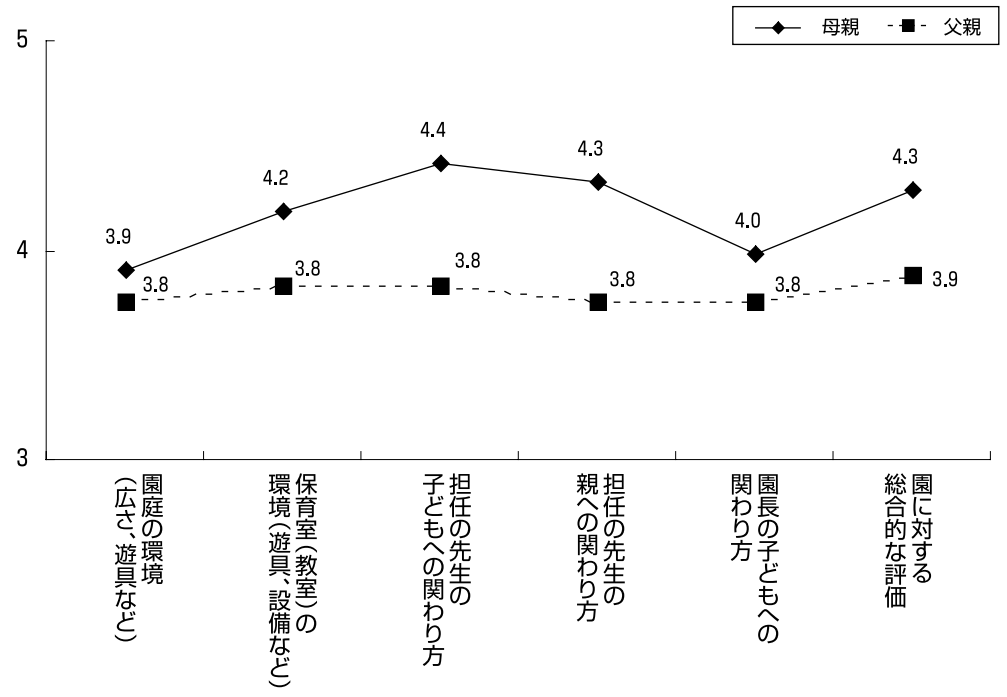
図表12−23　園の気に入っているところ



⑥園に対する満足度

園に対する満足度について5段階評価で回答してもらった結果が図表12−24である。母親では、「園庭の環境」を除く平均点が4を超えており、満足度は概ね高かった。中でも「担任の先生の子どもへのかかわり方」や「担任の先生の親へのかかわり方」に対する母親の満足度は高く、担任の先生に対する満足度は比較的高いことがわかる。平均点の最も低い項目は「園庭の環境（広さ、遊具など）」、次に低い項目が「園長の子どもへのかかわり方」となっている。また、父親の満足度は、すべての項目において母親より低くなっている。

図表12−24　園に対する満足度



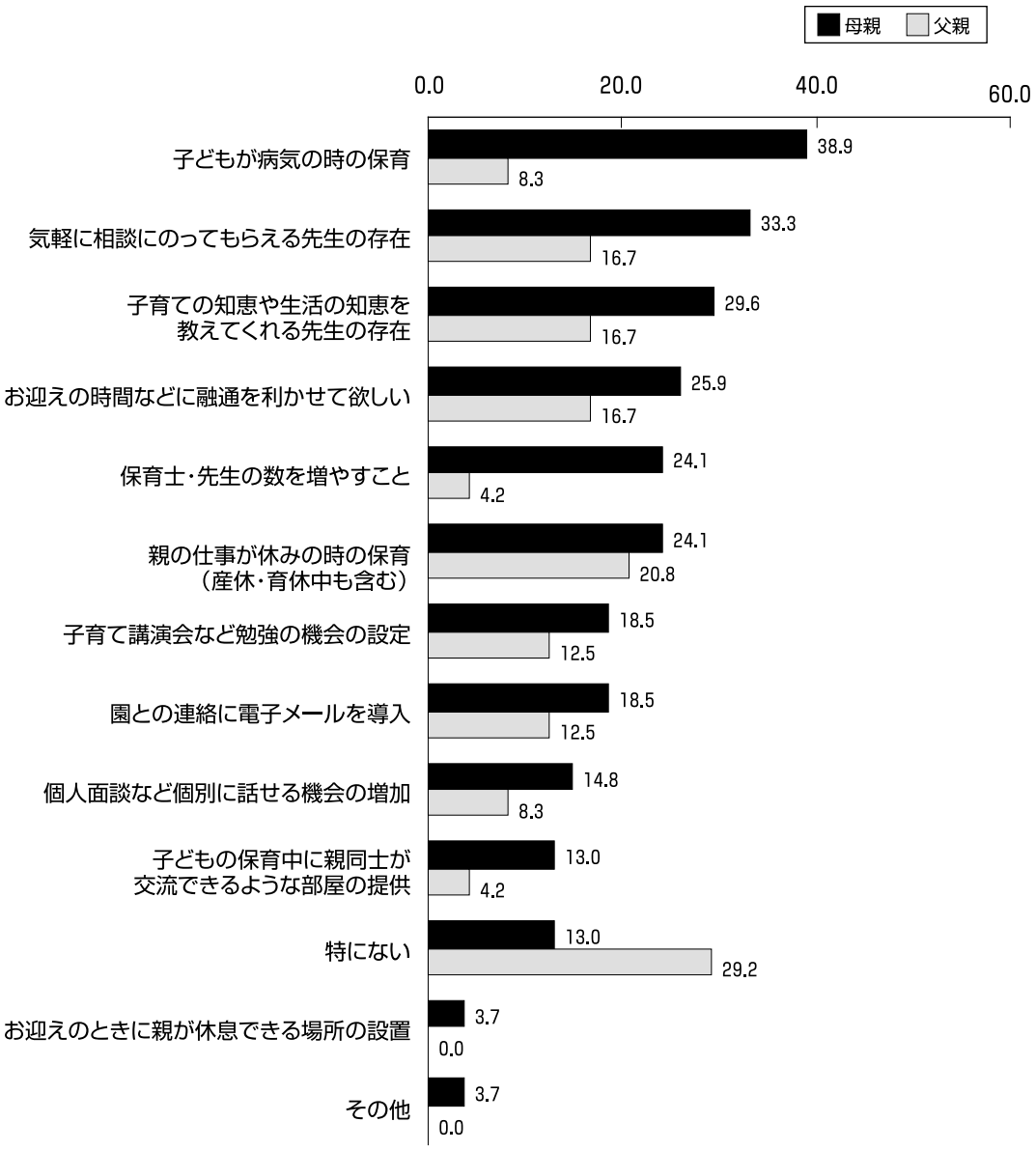
⑦園への要望

園への要望を示したものが図表12−25である。母親の回答で最も要望の高かった項目は、「子どもが病気のときの保育」であり、約4割の母親が病時保育を望んでいる。ちなみに本調査では、一時保育を利用する親が、日中、病児の看病を誰にしてもらっているかについてたずねており、その結果を示したものが図表12−26である。94.5%もの母親が「自分で看病をする」と回答しており、「子どもの父親が看病する」（10.9%）、「祖父母が看病する」（21.8%）という回答と比較しても、子どもが病気の場合はほとんど母親が看病している。こうした結果からも、子どもが病気の時には自分で囲い込むしかない母親の姿が浮かび上がり、母親にとって病時保育が切実な要望であることがうかがえる。

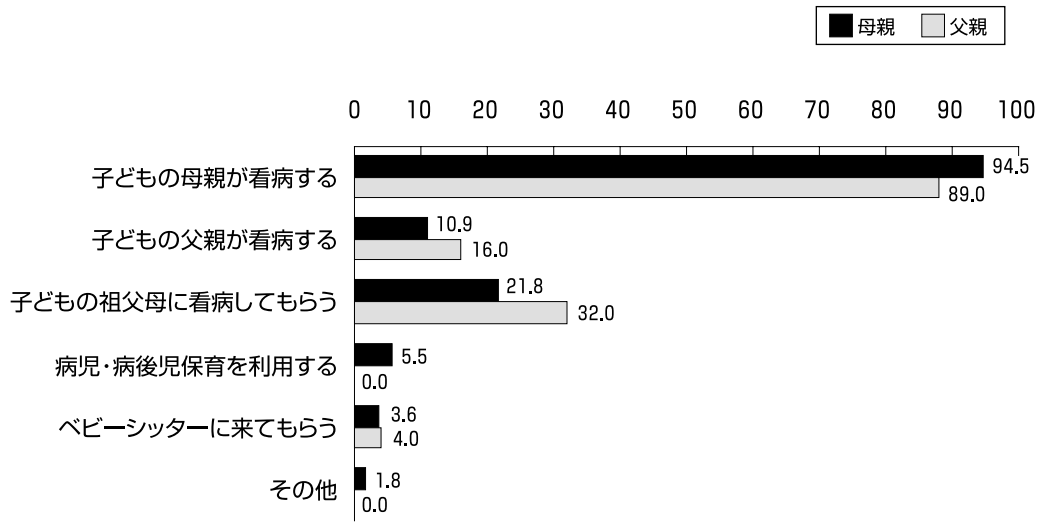
次に、「気軽に相談にのってもらえる先生の存在」（33.3%）や「子育ての知恵や生活の知恵を教えてくれる先生の存在」（29.6%）への要望が高くなっている。子どもを預かって世話をするという手段的サポートだけでなく、子育ての相談に応じてくれるという情緒的なサポートについてもニーズが高いことがわかった。孤立しがちで、子育てに関する情緒的サポートを得ることも困難な、現代の育児状況を示す結果であろう。

一方、父親では「特にない」という項目が最も高い割合を占めており（29.2%）、その他の項目でも全体でも2割を超えたものは1つのみで、園に対して消極的な父親の姿がうかがえる。父親が最も望んでいるものは、「親の仕事が休みのときの保育」で20.8%、次に多かったのは「気軽に相談にのってもらえる先生の存在」「子育ての知恵や生活の知恵を教えてくれる先生の存在」であり、父親においても子育てに関する情緒的サポートが求められていることがわかる。また、母親、父親ともに、「お迎えの時間などの融通を利かせてほしい」という要望が比較的高くなっている。

図表12−25　園への要望



図表12−26　子どもが病気の時の世話



(5) まとめ

これまで、延長保育など長時間保育に関する研究はなされてきたが、一時保育に関する調査研究はほとんどないのが現状である1。本調査では、一時保育を利用する母親、父親のそれぞれについて、属性や子育て不安、子育てに関する悩み、園に対する意識について、明らかにすることができた。まず属性については、学歴は母親、父親ともに大卒以上が最も多く、比較的高学歴層の利用が多い2。また、母親の約4割は、「無職・家事」の専業主婦であることがわかった。就業している親については、母親では「パート・アルバイト」が約4割を占めているが、「自営業・家族従業者」や「フルタイムの勤め人」、「自由業・フリーランス」といった回答もみられ、就業形態の多様化に応じて実施されるようになった一時保育の現状がよくあらわれている。労働日数は「5日」という回答が最も多いが、一時保育の利用頻度において「週に3日以上」が最多であることを考えると、本調査の対象者は、緊急一時的ではなく、非定型的利用をしている親の方が多かった。

家族形態については、ひとり親世帯が母親の16.4%、父親の8.0%を占めている。祖父母と同居している割合は、母親が27.7%、父親が20.0%であり、家族形態についても多様化している傾向がみてとれる。しかし、家族形態の多様化は、同時に育児サポートの希薄化を招いている。外出中に子どもの世話をしてくれる人については、母親では配偶者が約7割、親が約5割を占めており、その他のインフォーマルネットワークが充実しているとはいいがたい。育児の相談相手という情緒的サポートについても同様の傾向がみられた。家族形態の多様化にともない、配偶者や親からのサポートを受けることができない親は増加していき、一時保育の重要性はより高まるものと思われる。

子育ての不安については、母親では通常保育を利用する母親と育児不安得点に差がみられないが、父親では一時保育を利用する父親の方が、育児不安が高いことがわかった。また、子育ての悩みについては、母親では「叱り方のこと」や生活習慣のことが上位にあげられている。一方、

父親では「子どもがいうことをきかない」ことや「世話が大変」であることが多くあげられていた。また、母親に比べて、「子どもの接し方がわからない」という悩みも多かった。従来、わが国において浸透してきた父親像は「子どもにいうことを聞かせる存在」であり、子どもの世話は母親がやるべきものだという規範は根強い。一時保育を利用する父親は、通常保育を利用する父親に比べて、家事育児にたずさわる時間が長く、そうしたジェンダー規範から自らを解放しなければならない父親の悩みが、こうした結果にあらわれているのではないだろうか。

次に、園の理念や方針についてであるが、「園の理念や方針に賛同して入園を決めた」という回答が、母親、父親ともに4割以上を占めている。通常保育を利用する親に比べ、一時保育を利用する親は、園の理念や方針をより重要視していることがわかった。しかし、「園の理念や方針が保育内容に反映されている」という意識はあまり持っておらず、この点に関して改善していく必要があるだろう。

一時保育の利用頻度は、母親と父親でそれ程差がなかったが、利用している園や、担任の先生に対する意識には大きな差がみられた。父親が「担任の先生と話す頻度」は、ほとんどないという回答が7割以上を占めており、「園の保育方針」についても、「説明を受けていないのでわからない」と回答した父親が3割以上を占めている（母親では1割に満たない）。父親の回答からは、利用している園や担任の先生に対して消極的な態度が目立つ。しかし父親の「園への満足度」をみてみると、どの項目も母親を下回っており、決して現状に満足しているわけではないことが伺える。園としては、父親に対して積極的に話しかけていくことも必要と思われる。

最後に、園への要望から読み取れることを述べておきたい。園に対しては「病時保育」やお迎えの時間に柔軟であることなどのニーズが高くなっているが、同時に「気軽に相談にのってもらえる先生」「子育ての知恵や生活の知恵を教えてくれる先生」も求められている。また、園の気に入っているところについては、通常保育と異なり、「衛生管理や安全管理」という側面や、「親の悩みにしんしに応える」という子育て支援の側面があげられていた。先にも述べたように、一時保育利用者の大半は、親と同居していない核家族もしくはひとり親世帯である。さらに、インフォーマルな子育てネットワークが形成されているとは言いがたい。通常保育を利用していれば、子育てをする中で困ったことや気になることがある場合、他の保護者に相談するという方法もあるが、一時保育の場合、他の保護者との関係も形成されにくい状況にある。そうした背景から、一時保育利用者にとって、園の先生は子育ての悩みを相談し、子育ての知恵を提供してくれる重要な存在として位置づけられているのではないだろうか。一時保育を利用する中で、子どもを預けるだけでなく、子育ての相談をし、子育ての知恵を共有したいというニーズが高まっていることを指摘しておきたい。

注　1　社会福祉法人日本保育協会，2002，『ニーズに応える延長・一時保育』
　　2　全国における有配偶の男女、30～34歳の大学・大学院卒の割合は、男性が33.9%、女性が12.8%である（平成12年度国勢調査より計算）。

2．子育て広場

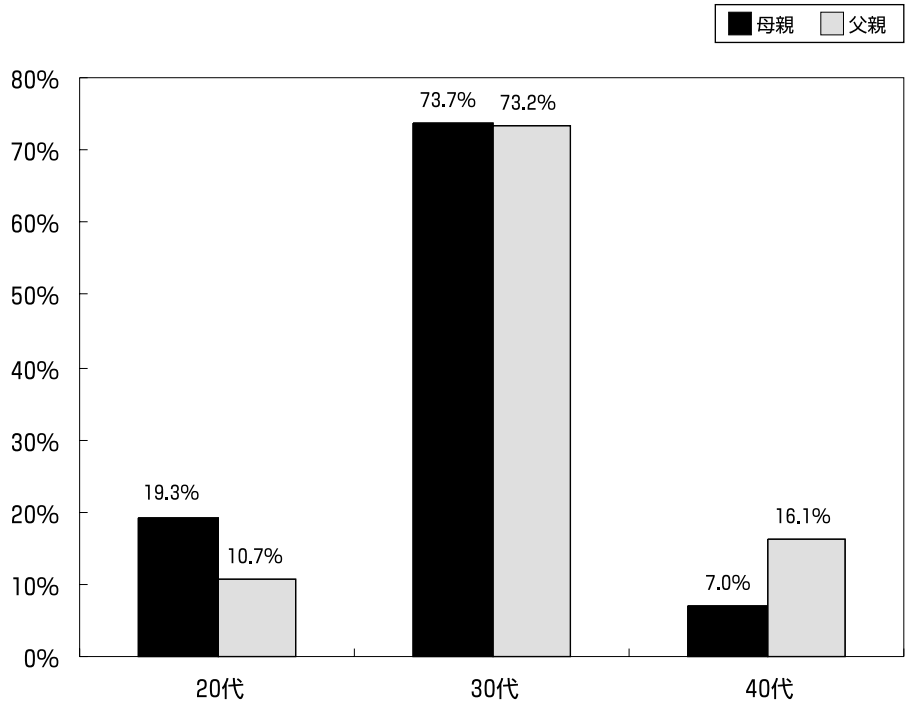
(1) 子育て広場利用者の概要

本節では、子育て広場調査に回答した母親56人（73.7%）人、父親20人（26.3%）、計76人（100%）を対象に分析を行う。

①基本属性

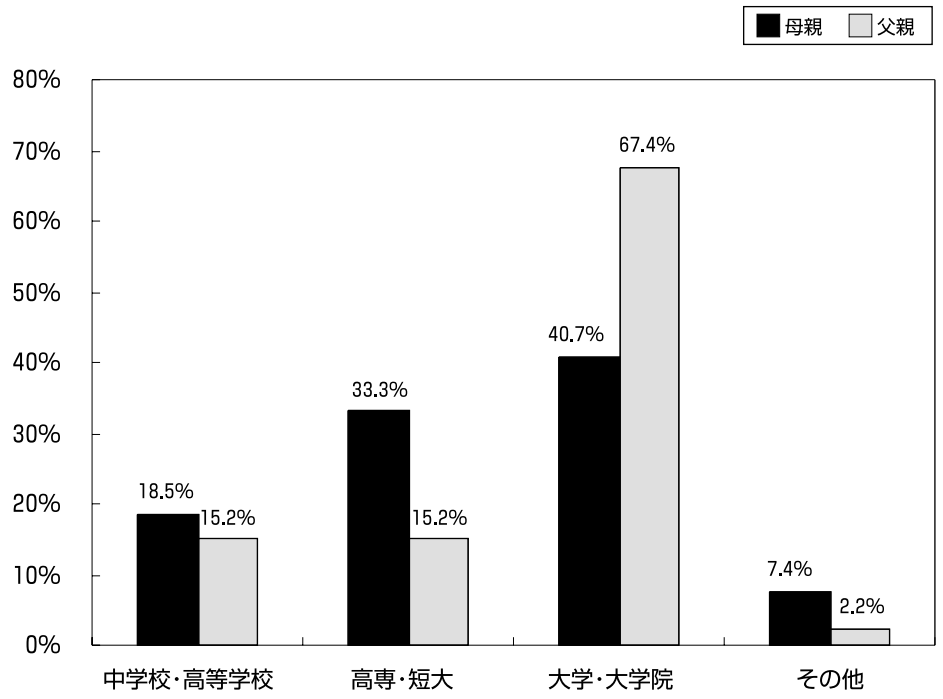
子育て広場を利用する親の年代は、父母ともに30代が最も多い（図表12−27）。次いで母親では20代、父親では40代が多いようだ。

図表12−27　利用する親の年齢



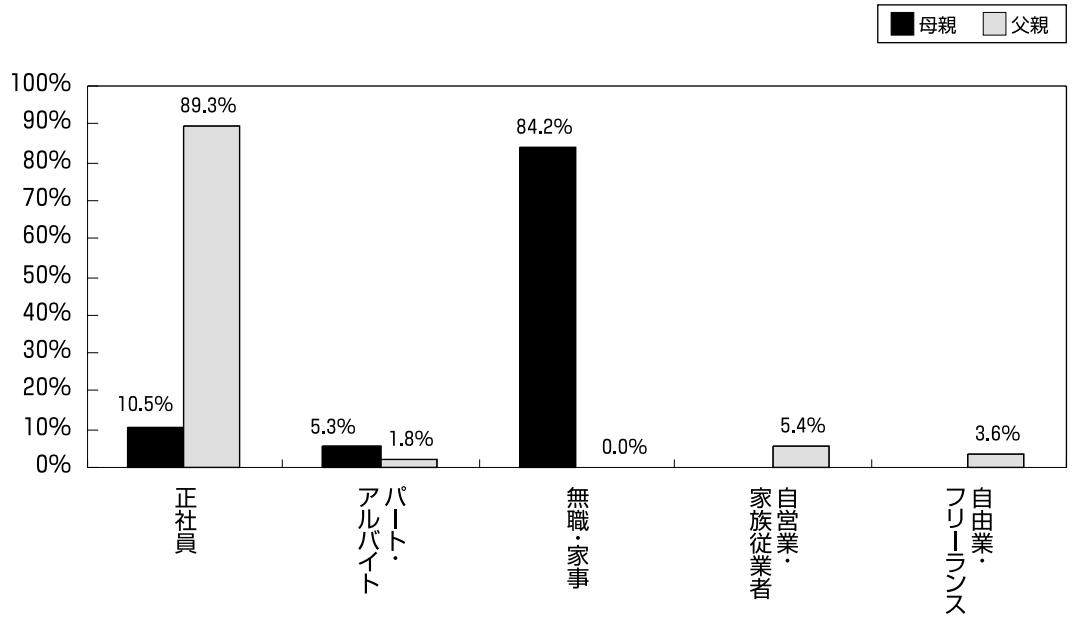
利用者の最終学歴について尋ねたところ、父母ともに大学・大学院卒との回答が最も多かった（図表12−28）。とりわけ父親の最終学歴が大学・大学院卒だとする回答は67.4%であり、他の回答と比較し圧倒的に多い。

図表12−28　最終学歴



図表12−29からは、利用者の大半は母親が専業主婦であり、父親が正社員の家庭であることがわかる。子育て広場の利用は父親よりも母親が多くを占めることはまた改めて後述するが、基本的に平日昼間の利用である広場の利用は、正社員やパート・アルバイトで働く母親には難しいた

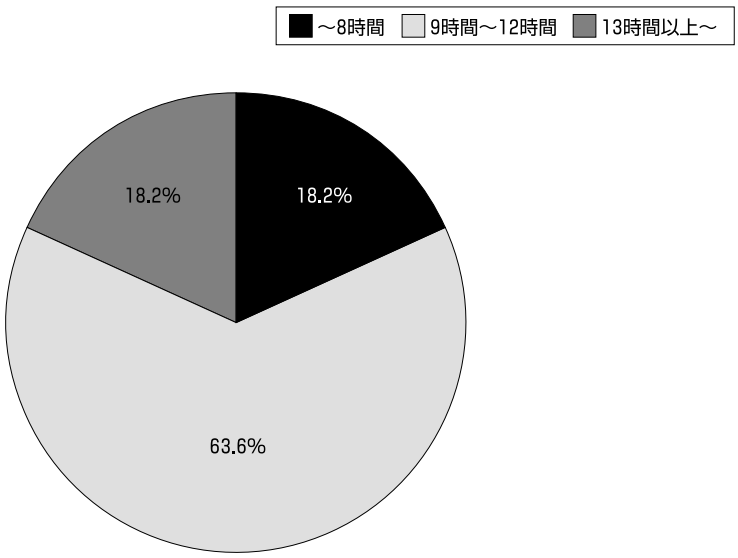
図表12−29　勤務形態



めに、このような結果になったと思われる。

母親の大半が専業主婦であることから、一日の勤務時間については父親のみをみた（図表12−30）。9時間〜12時間だとする回答が最も多く63.6%である。このことから平日はほとんどの時間、

図表12−30　父親の一日の平均勤務時間



子どもの相手は母親のみで行われていることがわかる。

広場を利用する子どもについては、年齢は長子の平均が2歳、末子が9ヶ月であり、最高年齢が5歳4ヶ月、最低年齢では4ヶ月である。そのうち保育園に通園中の子どもはおらず、幼稚園に通園している子どもが6.6%いた。これにより子育て広場を利用する子どもは比較的低年齢の乳幼児が主であることがわかる。さらに各家庭の子どもの人数は、1人が77.8%、2人が20.4%、3人が1.9%（n=54）であることから、とりわけ初めて子どもを持つ親の利用が多いことがうかがえる。一方、各家庭における祖父母との同居について尋ねたところ、父方の祖父母・母方の祖父母と同居している家庭はどちらも各3.5%以下（n=54）であることがわかった。よって利用者の家族構成は、ほとんどが両親・子どもの核家族のようである。

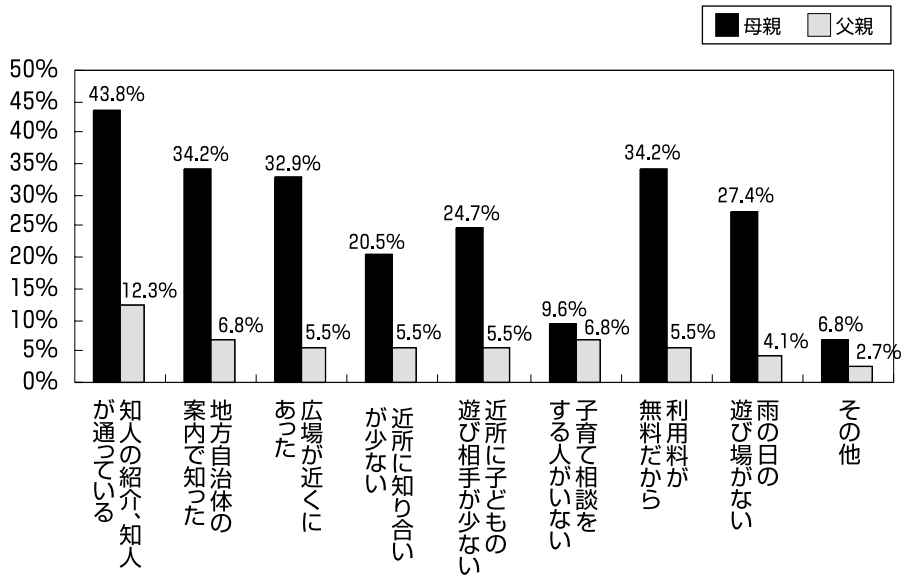
②子育て広場利用の現状

利用のきっかけとしては図表12−31にあるように、「地方自治体からの案内で知った」よりも「知人の紹介、知人が通っている」という回答が最も多く、口コミの影響力の強さを感じさせる結果となった。一方、「広場が近くにあった」、「利用料が無料だから」といった利便性も、広場利用に繋がっている。また、子どもの遊び場や遊び相手を求めての利用は多いが、親自身が知り合いをつくりたい、子育て相談をしたいという目的意識を持って広場を訪れることは、他の項目に比べると少ないようである。

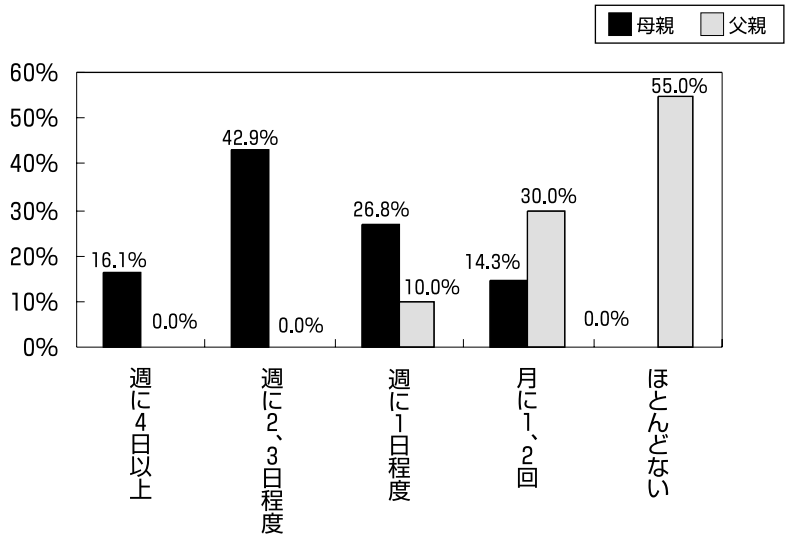
続いて利用頻度を見てみると、母親が週に2、3日程度訪れるというのが42.9%と大半である。

週4日以上通う人と合わせると59%であり、全体的に利用者の利用頻度はきわめて高い。一方で父親の利用はほとんどみられず、ごく少数であるのが現状のようだ。一回の利用時間は、母親の平均が2時間40分、父親が1時間程度である。

図表12−31　子育て広場利用のきっかけ（複数回答）



図表12−32　子育て広場利用の頻度（一週間）

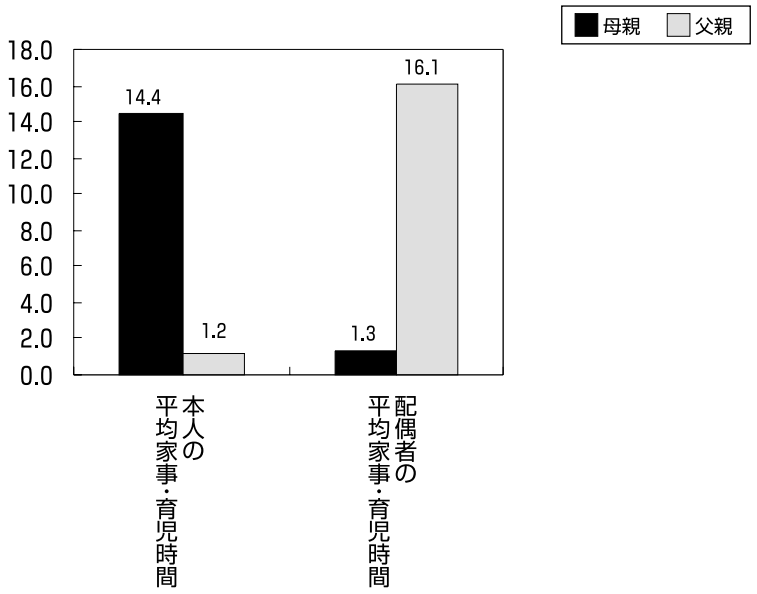


(2) 子育ての様子

一日の家事・育児に携わる平均時間を尋ねたところ、図表12−33の結果から分かるように、ほとんどの家庭において母親が家事・育児を主に担っているという結果となっている。また父親、母親どちらの場合においても、配偶者の家事・育児時間を本人の申告より多少多く見積もってい

るという傾向が見られた。母親が家事・育児の主体である場合が過半数だとする結果は、前述したようにこの調査では母親が専業主婦である家庭が大半を占めるため、より顕著に現われていると考えられる。

図表12−33　一日の家事・育児平均時間



続いて、家事育児の内容について詳しく触れたい。図表12−34においては、ほとんどの項目で、母親回答は週4日以上だとするものが過半数を超えている。子どものオムツ替え・トイレの手伝い、食事を手伝うといったごく日常的な子どもの世話は、週4日以上行う母親が90%以上なのに対し、同じく週4日以上行うという父親は30％程度である。また添い寝については母親が87.5%であるのに、父親は55%の人がほとんどしないと答えている。子どもの世話に関してはほぼ母親がメインで行われており、父親はあまり関与していないようである。ただし、子どもと一緒に夕食をとる、お風呂に入れる、の2項目に関しては、父親はそれぞれ65%、55％が週2、3日以上行うと答えている。しかし食事を一緒にとることは、子どもを世話するというよりも子どもとのコミュニケーションといった意味合いが強いように感じられる。父親の子どもとの関わりは世話をするというよりも、むしろコミュニケーション程度が主であると考えられる。一方家事については、食事の用意、洗濯、ともに母親が週4日以上行うという回答がほぼ100%に近い。父親は食事の用意をほとんどしないが90%、洗濯も75%であり、家事に関しては育児よりも更に参加度合いは低い。これらの結果より家事・育児の負担の多くは母親が背負っていることがわかる。専業主婦の母親が全体の8割を占めるとはいえ、父親の育児参加度は母親と比較すると非常に低く、育児はほぼ母親のみに任されている。日常的な子どもの世話において、大半の家庭では父親の関与はあまり期待できない現状のようである。

図表12−34　母親と父親の家事育児状況（母親n=56、父親n=20）

		ほとんどなし	月1、2回	週1回	週2、3日	週4日以上	無回答
子どもと一緒に買い物に行く	母親	1.8%	3.6%	8.9%	26.8%	58.9%	0.0%
	父親	5.0%	5.0%	50.0%	40.0%	0.0%	0.0%
子どもが友だちと遊ぶ様子を見る	母親	1.8%	1.8%	14.3%	30.4%	50.0%	1.8%
	父親	55.0%	20.0%	15.0%	5.0%	0.0%	5.0%
子どものおむつを替える／トイレを手伝う	母親	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	96.4%	1.8%
	父親	10.0%	15.0%	20.0%	20.0%	30.0%	5.0%
子どもの食事を手伝って食べさせる	母親	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	96.4%	1.8%
	父親	20.0%	5.0%	25.0%	25.0%	25.0%	0.0%
子どもと一緒に夕食をとる	母親	1.8%	0.0%	0.0%	3.6%	91.1%	3.6%
	父親	10.0%	5.0%	20.0%	35.0%	30.0%	0.0%
子どもに数や文字などを教える	母親	35.7%	5.4%	3.6%	14.3%	39.3%	1.8%
	父親	45.0%	15.0%	10.0%	20.0%	10.0%	0.0%
子どもと一緒にお風呂に入る	母親	0.0%	5.4%	1.8%	3.6%	89.3%	0.0%
	父親	10.0%	20.0%	15.0%	45.0%	10.0%	0.0%
子どもに絵本の読み聞かせをする	母親	7.1%	5.4%	7.1%	26.8%	53.6%	0.0%
	父親	25.0%	25.0%	15.0%	15.0%	20.0%	0.0%
子どもが寝付くまで添い寝をする	母親	0.0%	1.8%	0.0%	3.6%	94.6%	0.0%
	父親	55.0%	15.0%	10.0%	10.0%	10.0%	0.0%
夜中に起きて子どもの世話をする	母親	1.8%	1.8%	5.4%	3.6%	87.5%	0.0%
	父親	35.0%	35.0%	5.0%	15.0%	5.0%	5.0%
食事の用意をする	母親	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	98.2%	1.8%
	父親	90.0%	5.0%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%
洗濯をする	母親	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	98.2%	0.0%
	父親	75.0%	10.0%	5.0%	0.0%	10.0%	0.0%

続いて、母親、父親それぞれの身近に、子育てについてサポートしてくれる人がいるかどうかを尋ねた（図表12−35）。自分の外出時、子どもの世話をしてくれる人が自分以外にいるかどうかについて、配偶者だと答えたのは、父親100%、母親も85.7%と大多数であった。配偶者に次いで多かったのは親、という回答で母親・父親双方の回答は5割を超えている。他は兄弟・姉妹が2割程度、残りは1割程度と少ない。外出時に子どもの世話を頼む相手はごく限られるようである。子どもの預け先としては他に一時保育やベビーシッター、ファミリーサポートセンターなどの利用が考えられるが、一時保育で20.8%(n=53)、ベビーシッター、ファミリーサポートセンターではそれぞれ5%未満(n=56)と、その利用は少なかった。

図表12−35　外出中、子どもの世話をしてくれる人

		いる	いない	該当者がいない
配偶者	母親	85.7%	14.3%	
	父親	100.0%	0.0%	
親	母親	60.7%	39.3%	
	父親	55.0%	45.0%	
兄弟・姉妹	母親	23.2%	71.4%	5.4%
	父親	20.0%	80.0%	
親戚	母親	7.1%	92.9%	
	父親	10.0%	90.0%	
保育園・幼稚園の友人/知人	母親	7.1%	92.9%	
	父親	5.0%	95.0%	
同じ職場の人	母親	0.0%	37.5%	62.5%
	父親	0.0%	100.0%	
友人/知人	母親	14.3%	85.7%	
	父親	5.0%	95.0%	

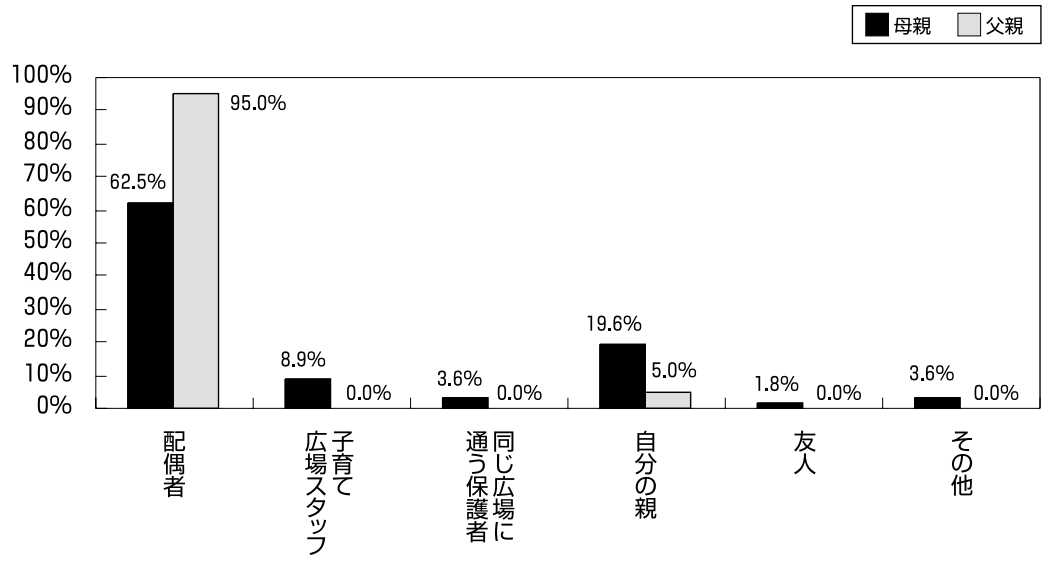
図表12−36　育児の相談に乗ってくれる人

		いる	いない	該当者がいない
配偶者	母親	89.3%	10.7%	
	父親	95.0%	5.0%	
親	母親	78.6%	21.4%	
	父親	65.0%	30.0%	5.0%
兄弟・姉妹	母親	40.0%	54.5%	5.5%
	父親	30.0%	70.0%	
親戚	母親	16.1%	83.9%	
	父親	25.0%	75.0%	
保育園・幼稚園の友人/知人	母親	39.3%	60.7%	
	父親	10.0%	90.0%	
同じ職場の人	母親	5.4%	35.7%	58.9%
	父親	35.0%	65.0%	
友人/知人	母親	83.9%	16.1%	
	父親	10.0%	90.0%	

次に育児の相談相手を見てみると（図表12−36）、配偶者であるとする回答は父母ともに最も割合が高く、子育てのパートナーとして父母のどちらも配偶者を重視していることがわかる。他に、親だとする回答が父母どちらも過半数である。子育ての大先輩である親の存在は、配偶者以外で最も子育てのサポートを頼みやすい、夫婦の頼れる存在であることがわかる。また母親に関しては、友人/知人に相談相手がいるという回答が、配偶者とほぼ変わらない83.9%と非常に高い割合を占めた。育児を主に担う母親にとって配偶者とは別に、同じ母親としての目線で相談しあえる友人の存在は大きいようである。

さらに、子どものことで最も相談できる人を聞いたところ、父母ともに「配偶者」であるとする回答が圧倒的に多かった（図表12−37）。ただし、母親については父親の95.0%よりも若干下がる62.5%にとどまっており、配偶者に次いで多い回答が「親」であった。これは前述の表12−3における相談相手の結果とは異なる結果である。また親に次いで「子育て広場スタッフ」を最も相談できる相手とする母親も、8.9%と若干高めであるのは、利用者の母親が広場スタッフに信頼を寄せていることのあらわれだと言える。

図表12−37　子どものことで最も相談できる人（母親n=56、父親n=20）



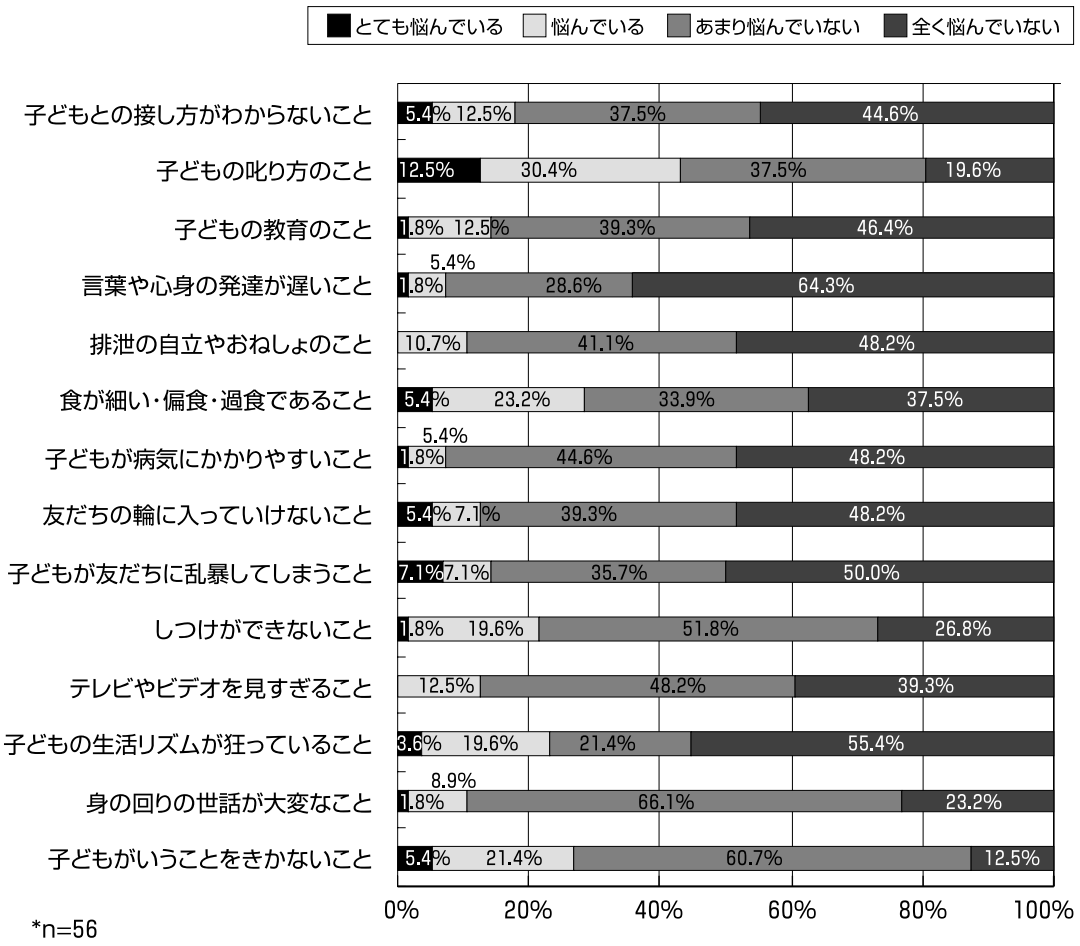
(3) 子育ての悩み

子どもを育てていく中で、親は様々な心配事や不安を抱える。また、子ども中心の生活にならざるを得ないことで、親自身の為の時間はなかなか作れない。そうした毎日が続いていく中で、時に育児のストレスや不安は解消されないまま蓄積されることもある。ここでは子育て中の親が抱える不安の現状を概観し、それらを引き起こす要因、また緩和させている要因を検証したい。分析する上では父親回答数が極端に少ない為、ここでは母親票のみを分析対象とする。

現在、子育てにおいて悩んでいること、不安に思っていることを尋ねたところ、母親の不安は、叱り方、食の問題、しつけ、生活リズムの狂い、言うことをきかない、の5項目で強い傾向が見られた（図表12−38）。食に関しては、しつけと、健康面での憂慮の両方の意味合いが考えられ

るが、大まかには、これら5項目はしつけに関連する項目であると考えられる。しかし全体的にみて、悩んでいるとする回答は最も多い叱り方の項目で42.9%だが、他は多くて20%程度と低めの傾向である。

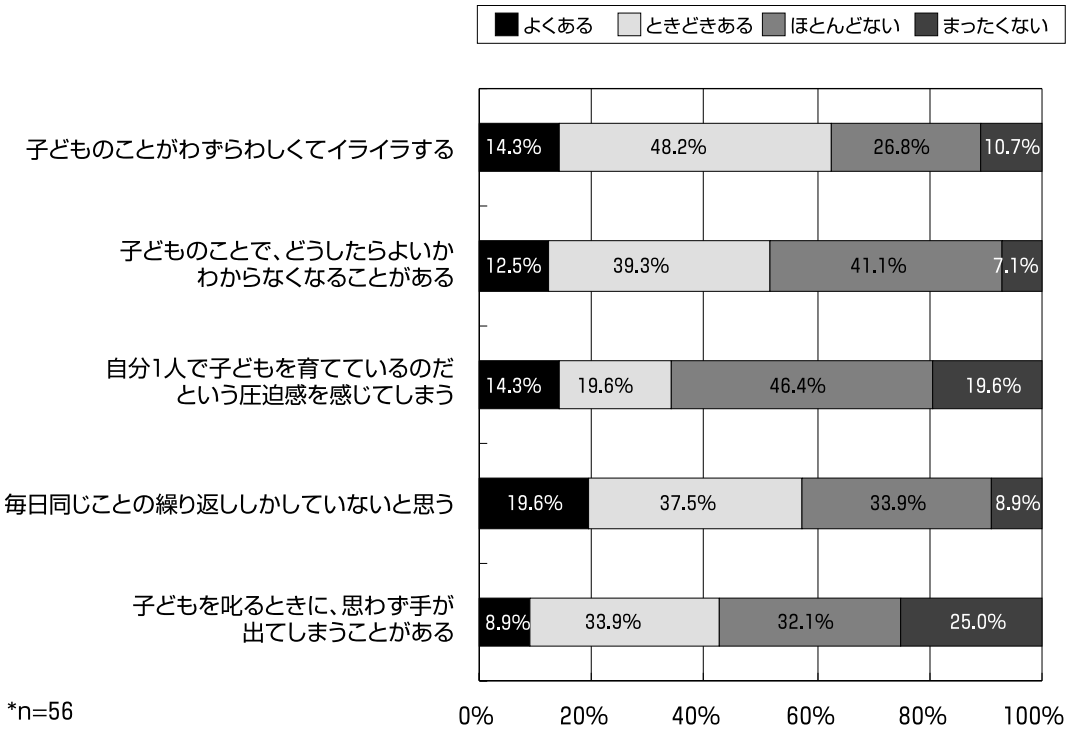
図表12−38　現在、子育てについて悩んだり、不安に思っていること



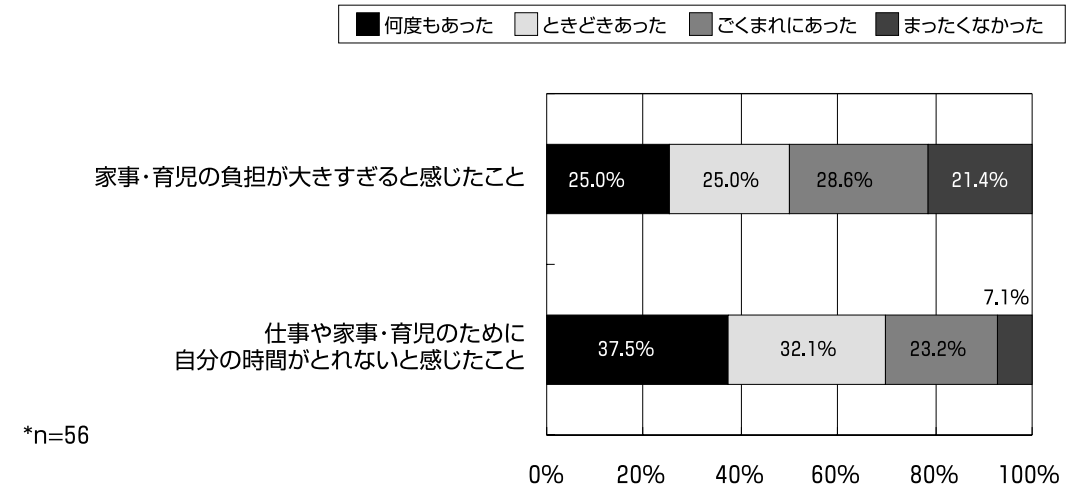
次に、子育てをする中で生じる不安について質問した結果が図表12−39である。「1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じることがある」以外の項目については、「ある」と答えた人がすべて50%を超えていることは、程度が軽いにしろ、深刻にしろ、母親たちは育児に携わる中しばしば不安にさらされている状態にあるのだと言えるだろう。

さらに、家事・育児の負担や拘束時間についての設問の回答では、「1日の家事・育児の負担が大きすぎる」、「仕事や家事・育児のために自分の時間が取れない」と感じることがあった母親は、全体の半数を超えている（図表12−40）。「自分の時間が取れない」ことについては、既出の通り、母親は家事育児時間に平均半日以上を費やしているためであると考えられる。こうしてみると、母親たちは子育て中に直面する具体的な事柄について強く困難感を抱き、悩んだり不安を抱いているというよりは、むしろ子育てや家事に追われるばかりの生活リズムの中でイライラや不安感、困難感を募らせているように見受けられる。そこで、続いては育児不安にはどういう要因が絡んでいるのか、その構造を詳しく見ていく。

図表12−39　育児について、次に挙げるようなことがどの程度あるか



図表12−40　1ヶ月ほどの間に次のようなことがどのくらいあったか



「子どものことがわずらわしくてイライラする」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」「自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」の4設問について、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「ほとんどない」を2点、「まったくない」を1点として、4設問の平均得点を「育児不安得点」とする。以下、この育児不安得点と家事・育児時間の長さ、育児の内容、育児支援者の存在

とはどのような関係にあるのかを検証する。

まず、育児不安得点と家事・育児時間の関連を見た（図表12−41）。時間の長さにかかわらず、分布はおおよそ不安得点の最頻値である2.5点を中心としたものであるが、育児時間が半日を超える「13〜16時間」「17時間以上」の群に関しては、2.5点よりも点数の高い方に分布が集まっており、他の群より育児不安の強い傾向が分かる。

図表12−41　母親の家事・育児時間と育児不安得点（n=56）

		母親育児不安得点												
		1	1.3	1.5	1.8	2	2.3	2.5	2.8	3	3.3	3.5	3.8	4
母親の家事・育児時間	6時間未満					1.9%								
	7〜12時間		1.9%		3.8%		1.9%	7.7%		1.9%	1.9%	1.9%		
	13〜16時間	1.9%			5.8%	7.7%	5.8%	13.5%	7.7%	7.7%		1.9%	1.9%	7.7%
	17時間以上			3.8%			1.9%	1.9%	1.9%		3.8%	1.9%		

続いて、母親が毎日行っている子育ての内容や悩みと、不安得点との関係を見ていく。子育てにおける悩み、家事・育児の負担度、子どもとの関わり、配偶者と子どもの関わり、生活満足度、自分の外出時に子どもの世話をする人、育児の相談相手、それぞれについて相関をとった結果を以下に提示した。

とりわけ子どもがいうことをきかない、身の回りの世話が大変である、しつけができない、子どもの叱り方のこと、接し方がわからない、の5項目において強い相関が見られた。さらにテレビを見すぎること、友達の輪に入っていけないこと、心身の発達が遅いこと、の3項目においても相関が見られる。これらのことから、子どものしつけが上手くいかないことは、育児の不安を高める傾向にあることがわかる。また子どもの世話によってかかる負荷や、子どもの発達に対する悩み、子どもとのコミュニケーションについての悩みも、育児不安を高める要因であることがわかった。

図表12−42　育児不安得点と子育てにおける悩みの相関（spearman）

		子どもがいうことをきかないこと	着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変なこと	夜更かしなど、子どもの生活リズムが狂っていること	テレビやビデオを見すぎること	しつけができないこと	子どもが友だちに乱暴してしまうこと	友だちの輪に入っていけないこと
母親育児不安得点	相関係数	0.569	0.452	0.216	0.297	0.593	0.103	0.321
	有意確率（両側）	0.000**	0.000**	0.110	0.026*	0.000**	0.451	0.016*

		子どもが病気にかかりやすいこと	食が細い・偏食・過食であること	排泄の自立やおねしょのこと	言葉や心身の発達が遅いこと	子どもの教育のこと	子どもの叱り方のこと	子どもとの接し方がわからないこと
母親育児不安得点	相関係数	0.022	0.000	0.132	0.284	0.157	0.397	0.657
	有意確率（両側）	0.873	0.998	0.334	0.034*	0.249	0.002**	0.000**

n=56　**:1%有意　*:5%有意

図表12−43　育児不安得点と子どもとの関わりの相関（spearman）

		子どもと一緒に買い物に行く	子どもが友だちと遊ぶ様子を見る	子どものおむつを替える/トイレを手伝う	子どもの食事を手伝って食べさせる	子どもと一緒に夕食をとる	子どもに数や文字などを教える
母親育児不安得点	相関係数	-0.457	-0.089	0.041	0.106	0.002	0.006
	有意確率(両側)	0.000**	0.516	0.763	0.436	0.989	0.965

		子どもと一緒にお風呂に入る	子どもに絵本の読み聞かせをする	子どもが寝つくまで添い寝をする	夜中に起きて子どもの世話をする
母親育児不安得点	相関係数	0.186	-0.069	0.168	0.195
	有意確率(両側)	0.170	0.612	0.216	0.150

n=56　**:1%有意　*:5%有意

育児不安と子どもとの関わりについて相関をとった結果では、1項目についてのみ強い相関がみられた（図表12−43）。この設問で挙げられた子どもとの関わりには、子どもの身の回りの世話である項目が多くを占めているが、図表12−42の「身の回りの世話が大変なこと」で育児不安得点と有意であったのとは異なる結果であることから、母親が「身の回りの世話」と考えることには、ここで取り上げた項目以外の類も存在することが考えられる。一方で、「子どもと一緒に買い物に行く」ことと育児不安得点とは、マイナスの相関が見られた。子どもと一緒に買い物に出かけることは、母親の育児不安を軽減することにつながるようである。

図表12−44　育児不安と家事育児負担度/配偶者・生活満足度の相関（spearman）

		仕事や家事・育児のため自分の時間がとれないと感じたこと	家事・育児の負担が大きすぎると感じたこと	配偶者の育児や子どもとの関わりについて	生活全体について	母親の家事・育児時間得点	子どもの数
母親育児不安得点	相関係数	0.338	0.599	-0.294	-0.341	0.179	0.340
	有意確率(両側)	0.011**	0.000**	0.028*	0.010**	0.205	0.014**

n=56　ただし「母親の家事・育児得点」「子どもの数」はn=52　**:1%有意　*:5%有意

図表12−44からは、家事・育児のために自分の時間が取れないと感じること、家事・育児負担が大きすぎると感じることと育児不安とに強い相関があることがわかる。また子どもの数が多ければ、当然子どもに費やす時間も悩みも増えるであろうから、不安も強まるのは道理であると考えられる。反対に配偶者の育児や子どもとの関わりに満足している場合は、育児不安は和らいで

おり、このことは配偶者の育児参加の重要性を示す結果といえる。また、生活全体について満足している人は、育児不安が低いことが分かる。

図表12−45　育児不安と育児サポートをしてくれる人との相関（spearman）

外出中、子どもの世話をしてくれる人

		配偶者	親	兄弟姉妹	親戚	保育園 幼稚園の 友人/知人	同じ職場 の人	友人/ 知人
母親育児 不安得点	相関係数	-0.048	0.220	0.143	0.275	-0.011	-0.131	0.070
	有意確率 (両側)	0.727	0.103	0.293	0.040 *	0.937	0.335	0.608

n=56　**:1%有意　*:5%有意

育児の相談にのってくれる人

		配偶者	親	兄弟姉妹	親戚	保育園 幼稚園の 友人/知人	同じ職場 の人	友人/ 知人
母親育児 不安得点	相関係数	-0.004	0.344	0.101	0.173	-0.164	-0.091	0.021
	有意確率 (両側)	0.979	0.010 **	0.462	0.202	0.226	0.504	0.876

n=56　**:1%有意　*:5%有意

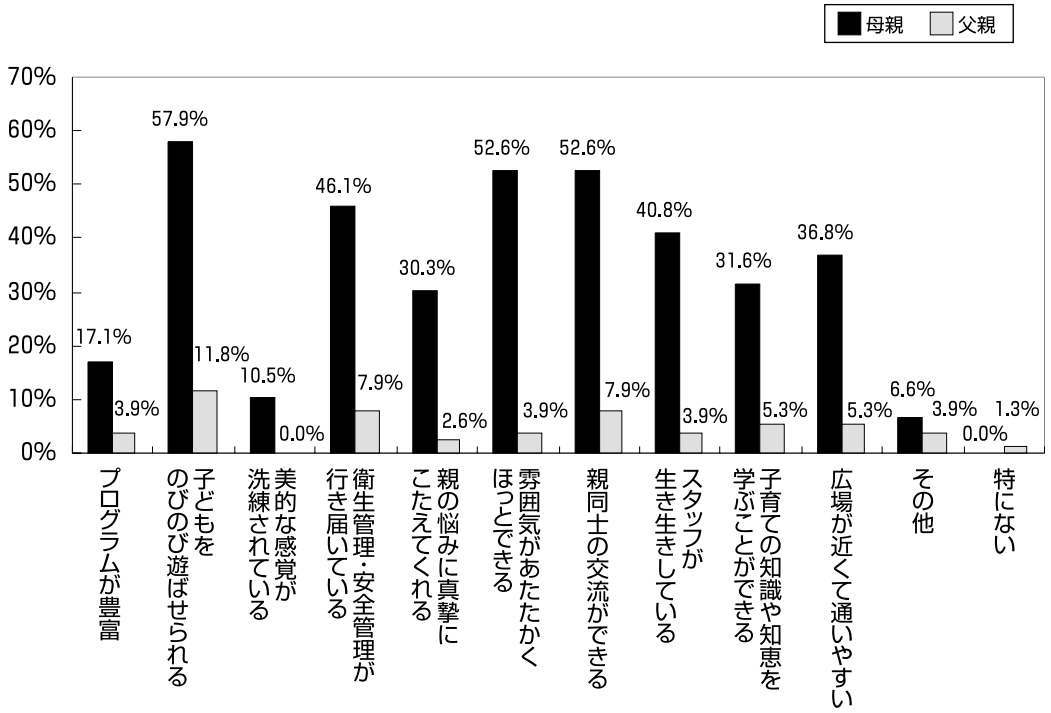
最後に、育児不安と育児のサポートをしてくれる人との相関をみたところ、「外出中、子どもの世話をしてくれる人」については「親戚」に、「育児の相談に乗ってくれる人」との相関では「親」の回答に相関が見られた。この結果については、別の詳細な分析を行った上で判断する必要があると思われるが、今回の調査結果のみでは詳細を推し量ることは不可能なため、今後の課題として保留する。

（4）子育て広場利用に対する満足度

冒頭の「子育て広場利用の現状」において示したように、回答者の母親のうち約60%が週2、3日以上という高い頻度で子育て広場を利用している。子育て広場のどういった点が利用者の満足や利用頻度につながっているのだろうか。ここでは利用者の広場満足度に繋がる要因を探る。

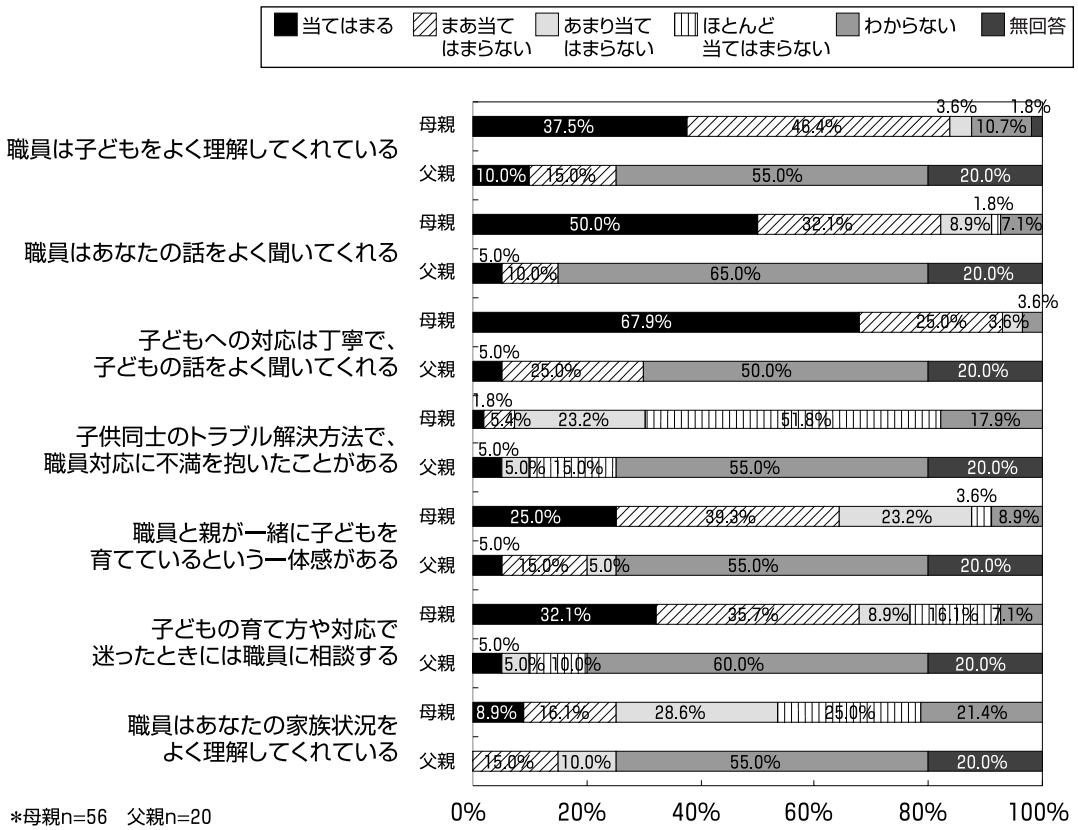
利用者の父母に子育て広場のどのようなところが気に入っているかを尋ねた（図表12−46）。母親回答では「子どもをのびのび遊ばせられる」「親同士の交流ができる」「雰囲気があたたかくほっとできる」の項目において高い評価を出している。また、衛生管理・安全管理の面でも利用者の50%を超える高評価を得ている。一方、父親回答では「子どもをのびのび遊ばせられる」が最も高く、次に「親同士の交流ができる」「衛生管理・安全管理が行き届いている」ことも高評価である。多少順位に差はあるが、母親・父親それぞれ広場を評価するポイントは、広場で親子が居心地良く過ごしていることを示す項目であることがわかる。

図表12−46　利用している広場の気に入っているところ



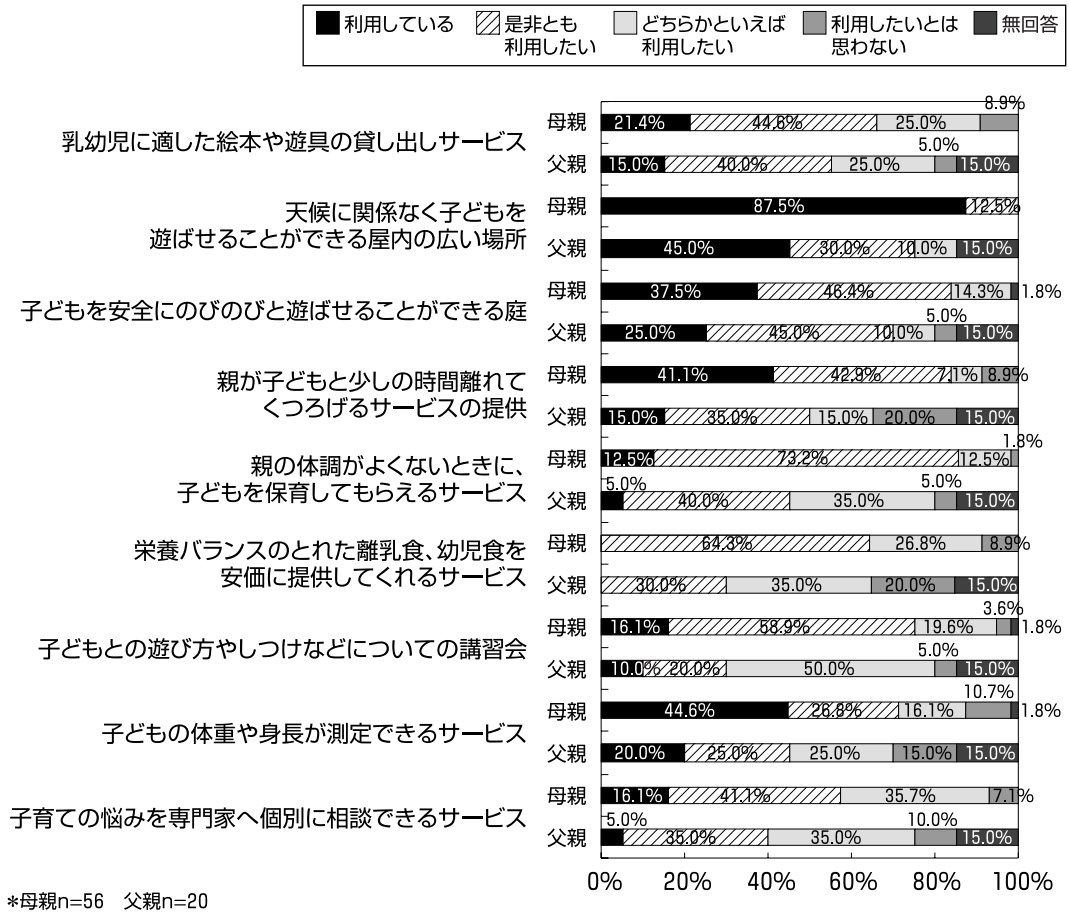
*母親n=56 父親n=20 複数回答

図表12−47　利用施設職員の対応について



*母親n=56　父親n=20

図表12−48　子育て広場で、利用している（したい）サービス



＊母親n=56　父親n=20

また、利用する子育て広場職員の対応をきいたところ、「職員は家庭状況をよく理解してくれている」以外については、母親の過半数が高評価である（図表12−47）。とりわけ子どもに対する接し方や対応への評価が高い。さらに親の話を聞いたり、相談に乗ったりの対応へも多く肯定的回答が得られた。また、「職員と一緒に子どもを育てている一体感がある」との回答も多く、職員たちが母親たちに寄り添って子育てのサポートを行っていることのあらわれであろう。一方、父親回答については各項目「わからない」とする回答が多く寄せられており、職員評価が正しくできていないようである。これは父親の広場利用頻度が極端に低い、または全くないために広場職員の評価ができない、わからないことからであると考える。

続いて、子育て広場で利用している（したい）サービスについて尋ねたところ、父母ともに最も回答の多いのは「天候に関係なく子どもを遊ばせることができる屋内の広い場所」であり、次いで多いのは「安全にのびのびと遊ばせることができる庭」である。現在の都心の住宅事情では、室内で子どもをのびのびと遊ばせるには狭すぎる家がほとんどであろう。また、近年子どもを狙った犯罪が横行しており、近所の公園ですら安全な場所ではなくなってしまっている。そんな中、親子が安心して遊べるスペースの存在は重要であり、この結果はそういった家庭・社会環境を反映したものだと思われる。他に、母親回答では「親が子どもと少しの時間はなれてくつろげるサ

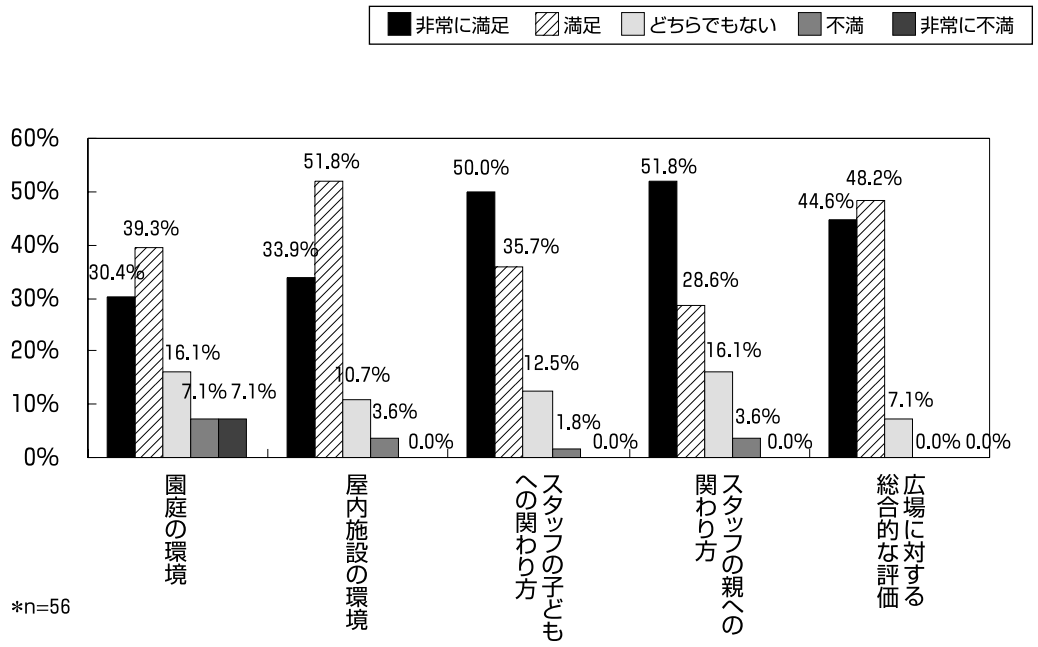
ービスの提供」、「親の体調が良くないときに、子どもを保育してもらえるサービス」といった一時保育的なサービスの積極的利用意欲が見られる。一時保育の利用については先述したが、保育園などで提供されているサービスを既に利用していると答えた人は、子育て広場利用者のうち20.8％である。現状のサービスだけでなく、子育て広場においても一時保育サービスを希望する母親が多いことは、現状のサービス利用についてなんらかの不満があるのか、または現状よりもより利便性やサービス質の良い一時保育サービスの提供を求めていることが考えられる。

続いて、広場の総合的な満足度、園庭、屋内施設、職員の子どもへの対応、職員の親への対応についての満足度の結果をみていく。ただし、以降の分析においては利用頻度の低い父親からは正確な結果が得られないと判断し、母親回答のみを対象として分析を行った。その結果（図表12−49）、園庭以外については各々80％以上の人の満足を得られていることが分かった。とりわけ、スタッフの子ども・親への関わり方については「非常に満足」と答えた母親が50％を超えている。

続いて広場に対する総合的な評価と、他の満足度項目とのとの相関をみた（図表12−50）。園庭、屋内施設、職員の子どもへの対応、職員の親への対応の4項目どれも、広場の総合的な満足度と深く関わっているが、とりわけ園庭以外の3項目は相関が強い。園庭に関しては広い敷地を確保することが困難である都心部の状況を反映し、他の項目よりもやや劣っていると判断できる。

ここまでの結果と併せて考察すると、広場へのアクセスの良さや利用コストが低いことを前提条件として、施設設備といったハード面と、職員の親や子どもへの接し方、職員対応というソフト面の双方が揃っていることが、広場にとって重要であることがわかる。また逆に言えば、安全で衛生的な施設と親と子どもへ真摯な対応をするスタッフが揃っているならば、教室や講習会、一時保育などといった趣向を凝らしたサービス提供の有無に関わらず、子育て広場利用の満足を得られると考えられる。まずはこの基本サービスを徹底していくことが、子育て広場にもっとも求められているニーズであるといえるだろう。

図表12−49　母親の子育て広場に対する各評価



図表12−50　母親の広場に対する各評価間の相関（spearman）

		園庭の環境	屋内施設の環境	スタッフの子どもへの関わり方	スタッフの親への関わり方
広場に対する総合的な評価	相関係数	0.498	0.644	0.613	0.641
	有意確率（両側）	0.000 **	0.000 **	0.000 **	0.000 **

n=56　**:1%有意　*:5%有意

(5) まとめ

子育て広場を利用する親の多くは専業主婦の母親であり、父親の利用はごく少数のようである。また利用者の子どもは2歳以下の低年齢の乳幼児が多いことがわかった。子育て広場利用のきっかけとしては知人の紹介によるものが最も多い。さらに広場の利用料が無料であること、広場が近所にあることなども、子育て広場利用の動機となっている。子育て広場の利用頻度は、母親の半数以上が週2、3日以上と答えており、頻繁に利用されていることがわかる。一方で父親の利用はほとんどみられないのが現状である。

子育て広場利用母親の一日の家事育児平均時間は、14.4時間と長時間である。これは前述のように母親たちのほとんどが専業主婦であること、子どもがまだ手のかかる低年齢であることなどからだと考えられる。母親と父親の家事育児への関与時間を比較すると、母親の関与が圧倒的に長いといえる。また、育児の相談相手について尋ねた結果は、母親父親それぞれの回答において自分の配偶者とする答えが圧倒的に多い。

子育てについて、具体的な例を挙げて悩んでいるかを尋ねると「ある」とする回答は全体的に少ないが、子育て全体においてイライラや不安を感じることがあるかとの問いには「ある」の回答が全体の半数程度と多い。育児不安感は家事・育児時間に携わる時間が長いほどに強くなる傾向が見られた。他に育児不安を強める要因として、子どものしつけや世話、コミュニケーション、発達について悩みを抱えていることが挙げられ、逆に育児不安を緩和する要因としては、配偶者の育児・子どもとの関わりに満足していること、子どもと一緒に外出することなどが挙げられる。

子育て広場の利用満足度について尋ねた項目では、広場の気に入っているところとして「子どもをのびのびと遊ばせられること」が最も多い57.9%の母親の支持を得ている。他に「雰囲気があたたかくほっとできる」「親同士の交流ができる」「衛生管理・安全管理が行き届いている」との母親回答も多く、親子ともに安心してくつろげる空間であることが、広場が支持される要因となるようである。広場の職員対応については、職位が親と子それぞれの話をきいてくれ、理解してくれていると認識している母親が半数を超えており、母親の広場スタッフへの信頼の高さをうかがわせる結果となった。

利用したい（利用している）サービスとしては、「天候に関係なく子どもを遊ばせることができる屋内の広い場所」「子どもを安全にのびのびと遊ばせることができる庭」との回答がいずれも6割を超えている。これは都心の住宅事情や安心して子どもを外で遊ばせることが困難な近年

の社会事情が背景にあると考えられる。さらに、「親が子どもと少しの時間離れてくつろげるサービスの提供」「親の体調が良くないときに、子どもを保育してもらえるサービス」についても6割を超える人が是非利用したい、または利用していると答えている。既存のサービスとして保育園等の行っている一時保育を利用するのではなく、新たに一時保育的サービスを広場に求めている点については、一つに現在提供されているサービスの供給不足や利用条件が合わない（定員がある、会員制で気軽な利用ができない、など）といった理由、もう一つにスタッフとの信頼関係が既に築かれている広場で一時保育サービスを利用するほうが安心である、といった理由が考えられる。

これらのことから考察すると、広場には多様な育児支援サービスを提供する前に、安全管理の行き届いた広い施設設備と、母親が信頼できるスタッフという基本的なサービス提供がまず最も重視されているといえる。人的・空間的に親子とも居心地のよく過ごせる広場を提供した上で、利用者の多様なニーズに対応するための一時保育や講習会、離乳食・幼児食サービスといった各種育児支援サービスの提供が行われていくことが望ましいと考えられる。

今回の調査ではサンプル数が少ないため、多変量解析を用いた詳細な分析は行えなかった。子育て広場については未だ先行研究も少なく、これからもより詳細な調査研究を行っていく必要がある。今後の課題としては、サンプル数を増やして多変量解析を用いた詳細な分析を重ねた上で子育て広場に対する母親・父親のニーズや現状の課題をより深く考察する必要があると考える。更に、調査対象施設を増やし、施設間での比較検討等を行っていくことも考えられる。

第13章　結論

本調査では、保育園、幼稚園、子育て広場を利用する保護者とそれらの施設の保育者、園長に対するアンケートを実施して、乳幼児を抱えた保護者の子育ての現状、保育園・幼稚園からのサポート、子育ての不安・悩み、追加出産意欲、保育園・幼稚園の経営と労働環境を調べた。各章で示したとおり、本調査から子育ての現状等について数多くの知見が見出された。本章では、調査から得られた主要な結果を整理して示す。

1．保育園・幼稚園を利用する保護者の子育ての現状

保育園・幼稚園を利用する保護者の子育ての現状を分析した結果からは、次の知見が得られた。まず、父母の子育てについてみると、既に指摘されることであるが、普段の子育ての大半を母親が担っていることが確認された。この点は、母親が専業主婦である家庭が多い幼稚園においても、共働きが大半を占める保育園においても同様である。保育園児の父親は、幼稚園児の父親に比べれば、子どもにかかわっている頻度は高いが、その分母親が子どもとのかかわりを減らしているのは送迎など一部の項目にとどまっている。母親では、家事、育児の負担が大きすぎると感じる者の割合が高い。特に、負担感が高いのは保育園の母親であり、仕事、家事・育児ともに時間が不足し、負担感が高い。普段の子育てには、保育園・幼稚園への送迎から食事の支度、着替えの世話等、保護者が行うことが求められるさまざまなタスクがある。これら全てを母親が行う状況は、母親に対して多くの子育てに関する心理的、身体的負荷がかかっていることを示す。こうした母親の子育ての負担を少しでも軽減できるような、就労環境や保育における支援が求められているといえる。

なお、現状において子育ての大半を母親が担っており、父親の子育て参加が少ない背景には、父親たちの労働環境の問題がある。父親が子どもと一緒に夕食をとる回数を調べると、「週4日以上」の者は26.0%に過ぎず、「週2―3日」が46.1%、「週1日」が20.2%となっている。週休2日制の職場であれば、子どもと一緒に夕食をとることが、「週2―3回」以下ということは、ほぼ休日のみしか子どもと夕食を共にすることができていないということである。近年、育児期にあたる年代の男性の長時間労働化がすすんでいる。父親の子育て参加が少ない背景には、そもそも父親たちには、それを可能にする条件が与えられていないという問題がある。

また、子育てをサポートするインフォーマルなネットワークについてみると、母親の多くは、外出時に子どもを預けられるネットワークを複数持っていることが見出された。ただし、保育園児のネットワーク数は、幼稚園児よりも少ない。さらに、子どもが病気の時、幼稚園児を持つ母親は自分で看病すると答えていることが象徴的するように、子育てに関する責任は事実上母親に一極集中している。こうしたリスクを吸収できるようなインフォーマルなネットワークは十分に育っていない。

保育園・幼稚園の利用状況については、次のような特徴がみられた。保育園児は、半数以上が延長保育を利用しており、在園時間も1日平均8時間47分と長い。ベビーシッターやファミリーサポートセンターの利用者は極少数であり、二重保育は一般的ではなかった。このことは、保育園

児にとって保育園が子どもの生活の場として重要な位置を占めていることを示している。幼稚園においても、延長保育や預かり保育を実施する園が増えている。しかし、それらの利用者は3割弱であり、在園時間の平均は5時間21分で、保育園よりも短い。

保育園児と幼稚園児の生活時間を比べると、幼稚園児は登降園が特定の時間帯に集中しているが、保育園児は登園や降園の時間帯の差が大きい。幼稚園児の母親よりも保育園児の母親の方が同じ園の保護者と話をする機会が少ないが、この背景のひとつに登降園の時間の違いがあると考えられる。このため、子育ての悩みなどを保護者同士で相談しあい、解決する機会は、保育園の保護者の方が少ないとみられる。

2．子育ての不安・悩みと保育園・幼稚園のサポート

保育園・幼稚園からのサポート、保護者の育児不安と子育ての悩み、追加出産意欲の関係を分析した結果からは、次の知見が得られた。

第一に、育児不安と子育ての悩みについてみると、母親のうち、「子どものことがわずらわしくてイライラする」ことがある者は6割弱、「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」者は4割強にのぼる。しかし一方で、子どものしかり方やしつけ、発達状態等、子育ての具体的なことで悩みを抱えている母親は多くはない。ここから、現代の母親が抱える育児不安や子育ての悩みの問題は、個々具体的な問題についての悩みというよりも、漠然とした不安感であることがうかがえる。

第二に、育児不安は父親よりも母親のほうが高い。母親の育児不安は長子年齢によって影響を受け、2～6歳の間は継続的に高く、子どもの年齢が上がるに従って直線的に減ってゆくものではない。長子が同年齢の場合は、子ども数が多いほうが育児不安が高い傾向がみられた。育児不安は母親の就労形態によっても違いがみられ、フルタイム就労の場合に低く、無職・家事、パート・アルバイト、自営業・自由業の場合が高かった。子の在園時間は短いほうが育児不安は高かった。母親の就労形態は親子の接触時間と密接な関わりがあるため、子と接する時間の長さが母親の育児不安の高さに結びつくことがうかがえた。さらに配偶者が育児・家事を行う時間が1時間以上である場合に、母親の育児不安は低い傾向がみられた。

子育ての悩みは父親よりも母親のほうが多いが、父母間の差は育児不安ほど大きくなかった。また子育ての悩みは長子が2歳の時点が最も多く、その後徐々に減っていくという傾向がみられ、末子の年齢はさほど関係がみられなかった。また自分の子以外の同年齢の子どもの様子を直接知る機会や、同年齢の子を持つ保護者同士で話をする機会が多いほうが、子育ての悩みが少ないという関連もみられた。育児不安が主に「親が一人で育児を抱え続ける大変さ」に起因するのに対し、子育ての悩みは子どもの発達過程を保護者が感覚的につかんでいるかどうかに左右されることが示唆された。

また、育児不安と子育ての悩みのいずれについても、「配偶者の育児や子どもとの関わりについて」の満足度に大きく影響を受けることが確認され、父母が互いに相手の子どもへの関わり方に満足ができるようになることが重要であることが示された。

第三に、保育園・幼稚園から保護者に対するサポートが多いほど、母親の育児不安や子育ての悩みは減少する。したがって、保育園・幼稚園から保護者に対してなされるサポートを充実させ

ることは、母親の育児不安や子育ての悩みを軽減することにつながる。このためには、保育園・幼稚園が、子育てで悩む者に対して、適切にサポートを行うことが求められる。このとき、フルタイムの母親はそれ以外の就労形態の母親よりも育児不安が若干低いが、子育ての悩みは就労形態による差はみられないことをふまえると、保護者に対するサポートは、特定の就労形態の者のみならず、どのような就労形態の者に対しても求められるものであるといえる。

ただし、現状では子育ての悩みを感じている母親は、保育者が想定しているほど多くはない。先述したとおり、具体的な悩みを感じている母親は少ないからである。しかしながら、分析の結果、悩みを感じている母親は、保育者からのサポートを強く求めていることが明らかになった。これらの結果をふまえると、保育園・幼稚園から保護者に対するサポートは、子育ての悩みの程度が軽い者までを含む多くの保護者に対して行うのではなく、悩みの程度が重い者に対して手厚いサポートを行うことが求められているといえる。すなわち、保育園・幼稚園からのサポートは、広く浅くではなく、狭く深くが効果的である。

このためには、保育者が、保護者の状況をよく理解して、サポートが必要な保護者を把握することが課題になる。その鍵を握るのが、保育者と保護者の普段のコミュニケーションである。現状では、保育者と保護者のコミュニケーションは、決して十分なものとはいえない。保育者のうち、「送迎時にお子さんの様子を直接伝えること」が「十分である」と答えた割合は15.5%、「どちらかといえば十分」と答えた割合は42.3％である。連絡帳によるやりとりは、同27.8％、38.9%である。保護者会や個人面談におけるコミュニケーションに至ってはさらに低い。保育園・幼稚園から保護者に対するサポートを効果的にするためには、保育者が、保護者と普段からのコミュニケーションを密接に行うことが必要である。

第四に、育児不安が高いことは、追加出産意欲を低下させることが見出された。育児不安が少子化のひとつの要因であることは指摘されてきたが、その関係が客観的なデータによって統計的に裏付けられたことの意味は大きい。この関係は、子ども数が1人の母親において強くみられる。具体的には、育児不安の程度が高い者から低い者まで4つのグループに分けた場合、子ども数が1人の母親のうち最も育児不安の程度が低いグループに属する者は0.76人追加で出産する意向があるのに対して、最も育児不安の程度が高いグループに属する者はその値が0.52人で、0.24人分少ない。また、子ども数が2人の母親でも、育児不安が高い方が、追加出産意欲が低くなる傾向がみられた。具体的には、子ども数が2人の母親の場合、最も育児不安の程度が低いグループに属する者は0.35人追加出産する意向があるのに対して、最も育児不安の程度が高いグループに属する者はその値が0.24人で、0.11人分少ない。

この点をふまえると、近年母親の育児不安が問題視されているが、それを軽減することは、育児不安からもたらされる追加出産意欲の減退を防ぐことになるため、ひいては少子化対策に寄与することが推察される。現在、わが国は少子化が進行しており、合計特殊出生率（15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、１人の女性が一生の間に生むと仮定した場合の平均子ども数）は2004年時点で1.29に落ち込んでいる。無論、合計特殊出生率と追加出産意欲は計算の思想も方法も異なるため、両者の値を一概に比較することはできない。しかしながら、近年合計特殊出生率が0.01ポイントの水準で変化することが社会的問題として注目されることをふまえると、育児不安が低いグループと高いグループにおいて子ども数1人の母親の追加出産意欲に

0.24人分差があることは、近年の少子化対策を考える上で決して無視できない差であるとみられる。少子化対策として、母親の育児不安を軽減する政策の充実が必要であろう。

保育園・幼稚園についてみると、保育園・幼稚園からのサポートを充実させることは、母親の育児不安を軽減する効果がある。育児不安の軽減は、ひいては育児不安からもたらされる母親の追加出産意欲の減退を防ぐことに寄与する。すなわち、保育園・幼稚園からのサポートを充実させることは、個々の母親の育児不安や子育ての悩みを軽減するだけではなく、少子化対策となる。母親の育児不安の軽減策としては多様な方法が考えられるが、保育園・幼稚園という既存の子育て施設において保護者に対するサポートを充実させることによっても、効果的な対応が可能であるとみられる。

さらに、保育園・幼稚園からのサポートが多いと、保護者の家事や育児の負担感が低下し、生活満足度が高まる。この傾向は、母親で顕著である。保育園・幼稚園からのサポートには、育児不安や子そだての悩みを軽減する効果のみならず、子育てをする家族の生活満足度を高める効果もある。

3．保育園・幼稚園の経営と労働環境

保育園・幼稚園の経営と労働環境に関する分析からは、次の知見が得られた。

まず、保育者の労働環境についてみると、保育園と幼稚園の性格の違いを反映して、1施設あたりの児童数は幼稚園の方が保育園よりも多く、保育者数については、常勤・非常勤とも、保育園より幼稚園の方が少ない。この結果、保育園よりも幼稚園の方が、一人の保育者が担当する子ども数が多く、保育者の負担が重い傾向がある。保育現場で経験する職務ストレスを分析すると、次の結果が得られた。私立保育園は業務過重のストレスが比較的高く、公立保育園は裁量と資源の不足のストレスが高い。幼稚園は業務過重のストレスが最も高い。職務ストレスが高くなるほど、バーン･アウトも大きくなる。これらの結果は、保育者の職務ストレスを軽減する対策の必要性を示唆する。

また、保育園・幼稚園の運営状況と保護者の評価の関係の分析からは、次の知見が得られた。第一に、保護者の満足度が高い園は非常勤保育者の割合が低く、満足度が低い園は非常勤保育者の割合が高い。第二に、保護者の満足度が高い園は常勤保育者の転出入が少なく、満足度が低い園では転出入が多い傾向がみられた。第三に、保護者の満足度が低い園では、保育者がある年齢層に偏ってはいないものの、高年齢者の割合が若干高くなっていた。一般に年齢が高い保育者の存在は保護者に安心感を与え、保護者に対するサポート力も高くなると考えられているが、本調査では、必ずしも年齢の高い保育者の割合が高いことのみでは、保護者の評価を上げることにはつながらないという結果であった。以上に示した結果から、常勤の保育者の割合が高く、かつ常勤の保育者の転出入が少ない園の方が、保護者の評価が高くなる傾向があるといえる。非常勤の保育者よりも常勤の保育者の方が、長期にわたって雇用されているために、経験年数が長く、かつOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）や研修の機会も豊富であり、保育者としての能力が蓄積されている。また、転出入が少ないことは、保育者が継続して同じ保護者と子どもをケアすることを可能にする。こうした理由から、常勤の保育者の割合が高く、転出入が低いことが、保護者の評価を高めていることが示唆された。

4．一時保育と子育て広場の利用者の特徴

一時保育と子育て広場は、保護者の子育て支援を目的とする施設として、近年広まってきている。本調査では、一時保育と子育て広場の利用者の特徴を調べた。

一時保育を利用する母親についてみると、約6割が就労者、約4割が専業主婦である。就労者の内訳をみると、フルタイム就労者よりも、パート就労者が多い。利用頻度は週3日以上が6割であり、一時保育とはいえ、実際には恒常的な保育として利用している者が少なくない。利用者の一時保育に対する評価をみると、通常保育利用者よりも、保育者の家庭に対する理解が少ないと感じている者が多い。利用者は、「気軽に相談にのってもらえる先生」「子育ての知恵や生活の知恵を教えてくれる先生」を求めている。

一方、子育て広場を利用する親の多くは専業主婦である。父親の利用はごく少数である。子どもは2歳以下の低年齢の乳幼児が多い。子育て広場の利用頻度は、母親の半数以上が週2、3日以上と答えている。保護者が現在利用しているまたは今後利用したいサービスとしては、「天候に関係なく子どもを遊ばせることができる屋内の広い場所」「子どもを安全にのびのびと遊ばせることができる庭」を求める声が多い。この背景には、都心の住宅事情や安心して子どもを外で遊ばせる場所の確保が難しくなってる近年の社会事情があると考えられる。また、「親が子どもと少しの時間離れてくつろげるサービスの提供」「親の体調が良くないときに、子どもを保育してもらえるサービス」を求める利用者の声が多いことから、広場の利用者は気軽に短時間利用できるサービスを広場に求めているといえる。

5．保育園・幼稚園における保護者に対する支援の充実

現在、乳幼児を抱えた保護者の子育ての不安や悩みが、社会的な問題になっている。本調査の結果をふまえると、保育園・幼稚園を利用する保護者については、保育園・幼稚園におけるサポートを充実させることが、彼らの子育ての不安や悩みを軽減することに寄与すると考えられる。

現状では、保護者の不安や悩みに応えるような支援またはサービスの提供が十分なされてはいない。本調査結果をふまえると、保護者の悩みや不安に応える具体的なサービスや支援を考えていくことが必要であるといえよう。

保育園・幼稚園において相談や情報提供等のサポートを効果的に行うためには、「広く浅くではなく、狭く深く」の方向で、全ての保護者に対して相談や情報提供を行うのではなく、悩みの程度が重い者に対して手厚いサポートを行うことが求められる。そのためには、回り道のようであるが、サポートの前段階として、日常の保育において保育者と保護者の間のコミュニケーションを密接にとり、保育者が保護者およびその子どもの状況を十分把握することが重要であるといえる。

少子化対策の観点からみると、以上のように保育園・幼稚園からのサポートを充実させることは、母親の育児不安を軽減し、育児不安からもたらされる追加出産意欲の減退を防ぐため、ひいてはわが国の出生率の向上に寄与すると考えられる。保育園・幼稚園において保護者に対するサポートを充実させることの効果は、1保育園、1幼稚園の範囲を超えた少子化対策としての意義も併せ持っているといえる。